

和仏法律学校講義録

梅, 謙次郎 / 兩角, 彦六 / 遠藤, 忠次 / 寺尾, 亨 / 掛下,
重次郎 / 加古, 貞太郎 / 若槻, 禮次郎

(出版者 / Publisher)

和佛法律學校

(巻 / Volume)

1-17

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

1899-10-05

新佛清律學

講義

第一卷

第七號

每月貳回

目次

國際私法	(自二九頁)	法學博士 寺尾 亨
相續法	(自三六頁)	法學士 若槻禮次郎
強制執行	(自六一頁)	法學士 遠藤 忠次
民法債權	(自二〇九頁)	法學士 兩角 彦六
親族法	(自二四五頁)	法學士 掛下 重次郎
民法物權	(自四九頁)	法學士 加古 貞太郎
民法原理	(自八八頁)	法學博士 梅 謙次郎



今學說カ實際ニ行ハレントスル傾向ヲ實例ニ依リテ示サンニ佛國ニ於テハ各
國公使館ニ各一名宛ノ學者ヲ派遣シ且外務省ニハ法律顧問ヲ置ケリ又英國ニ
モ王位顧問ヲ置キ殖民地ノ條約等重要ナル事項ニ付テハ之ニ諮問シ又伊太利
ニモ佛國ト同シク外務顧問ノ設アリ其他一個人ノ資格ヲ以テ國際私法ノ理論
ヲ實地ニ適用セント企ツル者甚タ多シ此等ハ何レモ有名ナル學者ナルヲ以テ
國際私法ノ問題ニ付キ有力ナル決定ヲ爲シ實際ニ於テ採用セラル、コト尠シ
トセス

右ノ外夫ノ有名ナル國際法協會アリ又英國ニ於テハ國際法改良及ヒ編纂學會
ノ設アリテ其研究ヲ怠ラス又一個人ノ事業トシテハ著書ノ外殊ニ實際ニ行ハ
レタル種々ノ實例ヲ蒐集シ國際法典ヲ編纂セントスル學者アリ今日最モ著名
ナルハ「ブルンチエリ」ニ「フィラレ」(伊「フィエルド」米等ナリトス

第二章 外國人ノ權利ノ享有

昔時ニ於テハ何レノ國ヲ問ハス外國人ヲ以テ野心ヲ抱ク者ト爲シ或ハ之ヲ仇
敵ノ如ク忌憚シ或ハ之ヲ賤民トシテ蔑視シ更ニ其權利ヲ認めサルノミナラス

甚シキニ至リテハ殆ト之ヲ人間視スルコトナク各國舉ツテ外人排斥ヲ以テ其主義トセシモノナリ是レ蓋シ古代ノ人民ハ宗教ニ心酔スルコト極メテ深ク而シテ自己ノ宗教ヲ尊信スルト同時ニ他宗ヲ嫌惡スルコト蛇蝎ノ如ク隨テ他宗ノ人民ヲ以テ人間以外ノモノト爲シ或ハ敵意ヲ挾ム者トシタリ此ノ如キ思想ヨリシテ外國人ノ内國ニ入ルコトヲ嚴禁シ又縱令之ヲ許ス場合ニ於テモ更ニ其生命財產ヲ保護スルコトナカリキ而シテ宗教心ノ漸ク薄弱ト爲ルニ及ヒテモ戰爭ヲ事トセル國民ハ外人ヲ疑フノ念深ク其國內ニ入ルニハ必ス敵意ヲ挾マサルコトヲ誓ハシメタリ然ルニ國際間ノ交通開ク世人カ商業學術等ニ因リテ互ニ往來シ且ツ其往來スル結果相互ノ人民カ他國ニ於テ尠末ノ權利ヲモ有セサルハ甚タ不便ナルコトヲ感シ外國人ニ對シテ多少ノ權利ヲ付與スルニ至リシト雖モ此時代ニ於テモ單ニ相互主義ヲ採リテ一方ノ國ニ於テ多少ノ權利ヲ與フルトキハ他國ニ於テモ同一ノ權利ヲ與ヘタルノミ

相互主義ニ二アリ一ハ即チ立法上又ハ事實上ノ相互主義ニシテ他ノ一ハ即チ條約上ノ相互主義ナリトス

一 立法上又ハ事實上ノ相互主義トハ一國ノ法律又ハ慣例ニ於テ實際外國人ニ一定ノ權利ヲ付與スルトキハ其外國人ノ本國ニ於テモ等シク同一ノ權利ヲ其國人ニ付與スルニ在リ

二 條約上ノ相互主義トハ特別ノ條約ニ從ヒ一定ノ權利ヲ限リ相互ニ相手方ノ人民ニ付與スルコトヲ約シ一樣ノ權利ヲ享有セシムルニ在リ

然ルニ近世ニ至リ内外國人平等主義ナルモノ發達シ各國ハ互ニ相獨立セルモ内外國人ノ取扱ヲ異ニスルカ如キハ甚タ謂レナキモノトシ一國ノ人民カ其國法ニ由リテ一切ノ權利ヲ保護セラル、以上ハ其國ニ渡來スル外國人ニ對シテモ一樣ノ保護ヲ與ヘサルヘカラスト爲シ内外人同一ノ待遇ヲ爲スヘキハ今日一般ノ通則ト爲レリ唯其性質上外人ニ許スコトヲ得サル權利ノミニ關シ其例外ヲ認ムルノミ隨テ今日ノ實際ニ於テハ或種ノ權利即チ私權ヲ如キハ内外人ニ因リテ毫モ區別スルコトナク若シ此種ノ權利ニ關シ外國人ノ享有ヲ禁ゼント欲セハ法律又ハ條約ヲ以テ明ニ之ヲ禁止スルヲ要シ而シテ之カ正反對ノ性質ヲ有スル權利即チ一國ノ組織ニ關スル權利ニ付テハ外國人タル資格ト相容

レサルカ故ニ全然之ヲ享有セシムルコトナシ蓋チ前者ハ人トシテノ權利ニシテ後者ハ國民トシテノ權利ナレハナリ

内外人平等ノ主義ハ其源ヲ佛國ノ大革命ニ酌メリ即チ革命政府ノ憲法ニ於テ自由平等友誼ノ三大原則ヲ認メタル結果ナリト謂ハサルヘカラス然レトモ當時ニ於テハ各國ノ立法主義未タ佛國ノ如ク進歩セザリシヲ以テ此進歩シタル平等ノ主義ハ却テ世論ノ非難ヲ受ケタルカ故ニ其反動ニ因リ法典ヲ編纂スルニ際リテハ却テ退歩シタル條約上ノ相互主義ヲ採用シタリ然ルニ實際ノ適用上ハ殆ント全ク平等主義ト爲レリ殊ニ近時ノ立法例ハ概テ平等主義ヲ採リ伊白獨等悉ク然ラサルハナシ唯佛國ハ百年前ノ法典ノ存スルカ故ニ外見上條約上ノ相互主義ヲ存スルノミ

右ニ述フル如ク内外人ヲ區別セサル權利及ヒ内國人ニ限ルノ權利ニ付テハ各國ノ主義概テ一定セリト雖モ此兩極端ニ屬セサル中間ノ權利ニ至リテハ國ニ因リテ其定ムル所必スシモ一樣ナラス即チ或國ニ於テハ比較的多少ノ權利ヲ外國人ニ許スモ或國ニ於テハ外國人ニ許ス權利ハ比較的ニ少シ例ヘハ版權著

去リ隨テ相續財産ト爲ラサルハ明カナルニ非ヌヤト然レトモ此說ノ如キハ第七百八十七條カ何等ノ區別ヲ設ケサルニ拘ハラヌ強テ區別ヲ設ケテ法文ヲ解スルモノニシテ探ルニ足ラス或ハ又曰ハン第七百八十七條第二項第三項ニ依リテ之ヲ觀レハ當事者ハ婚姻ニ因リテ得タル財産又ハ利益ノ返還ヲ爲サ、ルヘカラス故ニ此規定ノ婚姻ニ因リテ得タルモノニ非サル財産又ハ利益即チ特有財産ナルモノハ各當事者ニ於テ之ヲ保有シ決シテ家督相續人ニ移轉スルモノニ非サルコトヲ反面ヨリ顯ハシタルモノニ非ヌヤト然レトモ第七百八十七條第二項第三項ハ當事者ノ關係ヲ定メタル規定ナリ故ニ若シ婚姻ノ取消ニシテ家督相續ヲ開始セサル場合ニ於テハ當事者ハ固ヨリ其特有財産ヲ保有スルモノナレトモ婚姻ノ取消ニシテ家督相續ヲ伴フ場合ニ於テハ當事者ノ關係ヲ定ムルト同時ニ前戸主ト家督相續人トノ間ノ關係ヲ定メサルヘカラス而シテ當事者間ニ於テハ各自ノ特有財産ハ各自ニ之ヲ保有スヘキモノナレトモ前戸主ト家督相續人トノ間ニ於テハ前戸主カ保有シタル所謂特有財産ナルモノハ他ノ相續財産ト共ニ家督相續人ニ移ルヘキモノナリト云フハ第九百八十六

條ノ解釋上止ムヲ得サル所ナリト信ス

第五 養子縁組ノ取消ニ因ル家督相續ノ特例

養子縁組ノ取消モ亦其効力ヲ既往ニ及ホサ、ルハ第七百八十七條及ヒ第八百五十九條ノ明カニ規定スル所ナリ故ニ養子ニシテ戸主ト爲リタル後ニ其養子縁組ヲ取消サル、モ其當時マテハ養子縁組ハ有効ナルカ故ニ其間ニ於テ養子ニシテ戸主タル者カ取得シ又ハ負擔シタル權利義務ハ前ニ有セシ權利義務ト共ニ同シク其養子タル者ノ權利義務ナルカ故ニ第九百八十六條ノ規定ニ依リ總テ家督相續人ニ於テ承繼スヘキモノナリ而シテ養子縁組取消ノ場合ニ於テハ入夫婚姻取消ノ場合ノ如ク養子ノ戸主タリシ間ニ負擔セシ債務ノ辨濟ハ其養子ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得トノ規定ナキカ故ニ此場合ニ於テハ家督相續人ニ向テ請求スルノ外其養子ニ對シテハ請求スルコト能ハサルモノト云ハサルヘカラス何故ニ此二ツノ場合ニ於テ右ノ差異ヲ設ケサルヘカラスヤハ其理由ヲ知ルニ苦シム所ナリト雖モ解釋上以上述ヘタル如クナラサルヲ得ス

第六 國籍喪失ニ因ル家督相續ノ特例

國籍喪失ニ因ル家督相續ノ場合ニ於テハ家督相續人ノ承繼スヘキ權利義務ノ範圍ハ極メテ狭シ即チ原則トシテハ家督相續人ハ戸主權家督相續ノ特權ニ屬スル權利及ヒ遺留分ノミヲ承繼スルモノニシテ特ニ前戸主ノ意思表示アル場合ニ於テ其指定シタル相續財産ヲ相續スルコトヲ得ルニ過キス法律ハ戸主權及ヒ家督相續ノ特權ニ屬スル權利ノミヲ承繼スト云ヘルカ故ニ遺留分ハ特ニ前戸主ノ相續セシムルコトヲ示シタル場合ニ非サレハ之ヲ承繼セサルカ如シト雖モ素ト遺留分ナルモノハ法律ノ力ニ因リ家督相續人ノ必ス之ヲ受クヘキモノナルカ故ニ法律カ特ニ遺留分ヲ承繼セサルコトヲ定メサル限リハ當然家督相續人之ヲ承繼スヘキモノナリ是レ第九百九十條カ承繼スルコトヲ妨ケスト記載スルヲ以テモ明カナル所ナリ

家督相續人ハ亦前戸主ノ義務ヲ盡ク承繼スルモノニ非ス戸主ノ義務タル家族扶養ノ義務ナルモノハ固ヨリ家督相續人ニ移ルト雖モ前戸主ノ債務ハ家督相續人ノ受ケタル財産ノ限度ニ於テ辨濟スレハ足レリ故ニ其限度以外ニ於テハ債權者ヨリ前戸主ニ向テ請求スルコトヲ得ト雖モ家督相續人ニ對シテハ之ヲ

請求スルコトヲ得サルナリ蓋シ法律ハ我國ノ國籍ナキ者ハ戸主タルコトヲ得サルカ故ニ國籍喪失ヲ以テ家督相續開始ノ原因ト爲スト雖モ元來國籍ヲ失ヒタル者ハ爲メニ其財産ノ享有ヲモ失フコトヲ欲シタルモノニ非サルヲ以テ戸主タル地位ト離ル、コト能ハサル關係ヲ有スル權利義務ハ之ヲ家督相續人ニ移轉セシムト雖モ其他ノ權利ハ依然其者ヲシテ之ヲ有セシメタルモノナリ而シテ既ニ權利ニシテ多クハ家督相續人ニ移轉セシメサル以上ハ義務ノミ總テ之ヲ移轉セシムト云フハ條理ノ許ササル所ナルカ故ニ義務ノ移轉モ亦權利ノ移轉ト權衡ヲ保タシメタルモノナリ

第九百九十條第二項ハ國籍喪失者カ日本人ニ非サレハ享有スルコト能ハサル權利ヲ有セシ場合ニ於テ一ケ年内ニ之ヲ日本人ニ讓渡サ、ルトキハ其權利ハ家督相續人ニ歸屬スルコトヲ規定セリ今單純ナル理論ヨリ之ヲ言フトキハ土地所有權又ハ日本銀行橫濱正金銀行ノ株券等ノ如キハ日本人ニ非サレハ之ヲ享有スルコトヲ得サルカ故ニ國籍喪失者カ之ヲ所有セルトキハ國籍ノ喪失ト共ニ其所有權ハ當然無効ニ歸スルモノト謂ハサルヘカラスト雖モ此ノ如キハ

所有者ノ迷惑尠カラサルヘキカ故ニ茲ニ一ケ年ノ猶豫ヲ與ヘ之ヲ日本人ニ讓渡スコトヲ得セシメタルナリ而シテ一ケ年内ニ之ヲ日本人ニ讓渡サ、ルトキト雖モ之ヲ以テ無主物ナリトセスンテ家督相續人ニ歸屬スヘキモノトセリ蓋シ此ノ如クスルトキハ所有者ノ意思ヲ害スルコト最モ尠ク而シテ公ノ秩序ニ關スル法律ノ規定ヲ全ウスルコトヲ得レハナリ

第二章 遺產相續

遺產相續トハ家族ノ死亡シタル場合ニ於テ其遺留シタル財産ヲ承繼スルコトヲ云フ家督相續ニ在リテハ家長權ヲ相續スルノ結果トシテ被相續人ニ屬セル財産ハ自然ニ附隨シテ相續人ニ移轉スルモノナリト雖モ遺產相續ニ在リテハ相續人ハ他ノ權利ヲ取得シタル爲メニ財産ヲ承繼スルモノニ非ス初ヨリ財産ヲ承繼スル目的ヲ以テ相續ヲ爲スモノナリ其結果トシテ彼ト是トハ概テ左ノ如キ差異アリトス

第一 相續開始ノ原因ヲ異ニス

家督相續ハ戸主權ノ喪失アルトキハ常ニ開始スルモノナリト雖モ遺產相續ハ

家族ノ死亡ノ場合ノ外開始スルモノニ非ス

第二 相續人ノ數ヲ異ニス

戸主ナル者ハ一人ノ外二人アルコトヲ得サルモノナルカ故ニ家督相續ニ於テハ相續人二人以上アルコトヲ得スト雖モ財産ハ數人ニテ之ヲ共有シ又ハ之ヲ分割シテ享受スルコトヲ得ルモノナルカ故ニ遺産相續ニ於テハ相繼人二人以上アルコトヲ得ルナリ

第三 相續人ノ資格ヲ異ニス

家督相續人ハ戸主ト爲ラサルヲ得サルカ故ニ家政ヲ執ルニ堪フル者ナルコトヲ必要トスレトモ遺産相續ニ於テハ相續人ハ財産ヲ承繼スルニ止マルモノナルカ故ニ家政ヲ執ルニ堪能ナルト否トハ問フ所ニ非ス

第二章ハ以上述ヘタル差異ニ因リテ規定ヲ設ケタルモノナルカ故ニ此章ヲ説明スルトキハ自然其差異ヲ詳悉スルコトヲ得ヘキカ故ニ以下條文ニ入り述フル所アルヘシ

第一節 總則

此節ニ於テハ遺産相續開始ノ原因其場所遺産相續回復ノ請求權ニ關スル時効相續財産ニ關スル費用及ヒ遺産相續ニ付テモ胎兒ヲ以テ既ニ生レタルモノト見做ストノコトニ關スル規定ヲ掲ケタリ

家督相續ニ於テハ相續ニ付キ胎兒ヲ以テ既ニ生レタルモノト見做ストノ規定ハ之ヲ相續人ノ資格ヲ定メタル節ノ中ニ掲ケタルニ反シ遺産相續ニ於テハ之ヲ總則中ニ掲ケタリ此規定ハ一般ニ關スル規定ナリト謂フコトヲ得ヘク又相續人ノ資格ニ關スル規定ナリトモ謂フコトヲ得ヘキカ故ニ其規定ノ性質上ヨリ論スルトキハ條文配置ノ場所ニ付テハ孰レノ場所ニ於テスルモ非難スヘキ所ナシト雖モ然レトモ家督相續ニ關シテ既ニ此規定ヲ相續人ノ資格ヲ定メタル節ニ掲ケタル以上ハ遺産相續ニ至リテ獨リ之ヲ總則ノ規定ト爲スハ編次ノ體裁上宜シキヲ得タルモノニ非サルカ如シ

遺産相續ノ場所回復ノ請求權ニ關スル時効相續財産ニ關スル費用等ニ關シテハ家督相續ノ場合ニ於ケルト同一ナルカ故ニ茲ニ再說セス唯相續開始ノ原因ニ關シテハ家督相續ト同一ナラサル所アリ即チ家督相續ハ數多ノ開始原因ヲ

債權總則正誤中二一頁八行百圓以下ヲ未滿ニ
同九頁千圓以下ヲ未滿ト改メタルモ法文ニハ
百圓以下百圓以上若クハ千圓以下千圓以上ト
アルニ付キ原文ノ通り復活ス

有スルニ反シ遺産相續ハ單ニ家族ノ死亡ニ因リテ開始スルノミナリ蓋シ家督相續ハ家長權ノ承繼ヲ目的トスルカ故ニ苟モ家長權ノ喪失ナルモノアルトキハ即チ家督相續始マルト雖モ遺産相續ハ財産ノ承繼ヲ目的トスルカ故ニ家族ノ死亡シ其特有財産ニ付キ主體ナキニ至ルニ非サレハ相續ナルコトヲ必要トセサルヲ以テ此ノ如キ差異ヲ生スルモノトス

第二節 遺産相續人

第一 遺産相續人ノ資格

遺産相續人ト爲ルニハ左ノ三條件ヲ必要トス

- (一) 相續開始ノ時ニ於テ存在スルコト
 - (二) 法律上ノ缺格ナキコト
 - (三) 裁判上ノ失權者ナラサルコト是ナリ
- 舊民法ニ於テハ家督相續人ニ關シテハ法律上ノ缺格及ヒ裁判上ノ失權ノ場合ヲ規定スレトモ遺産相續人ニ付テハ之ヲ規定セス然レトモ遺産相續ノ場合ト雖モ或事故アル者ヲシテ相續人タルノ資格ヲ有セシムルコトヲ得サルノ理由ハ寧モ家督相續ノ場合ト異ナルコトナキカ故ニ親民法カ舊民法ノ瑕瑾ヲ補ヒ遺

産相續ニ於テモ是等ノ要件ヲ必要トセルハ洵ニ至當ノ修正ナリト謂フヘシ

ハ今ヨリ右ニ掲ケタル三個ノ條件ニ付キ少シク説明スル所アルヘシ

- (一) 相續開始ノ時ニ於テ存在スルコトヲ必要トス
是レ家督相續人ニ要スル條件ト同一ナルカ故ニ再ヒ述フルノ必要ナシ
- (二) 法律上ノ缺格ナキコトヲ必要トス
此條件モ亦大體ニ於テ殆ト家督相續人ニ要スルモノト同一ナリ然レトモ唯遺産相續人ハ數人同順位ニテ相續スルコトヲ得ルモノナルカ故ニ第九百九十七條カ故意ニ遺産相續ニ付キ同順位ニ在ル者ヲ死ニ致シ又ハ死ニ致サントシタル爲メ刑ニ處セラレタル者ヲシテ遺産相續人ト爲ルコトヲ得サラシメタル點ニ於テ少シク家督相續人缺格ノ場合ト異ナルノミナリ而シテ第九百九十七條ノ此ノ如キ規定ヲ爲シタル理由ハ家督相續人ノ場合ニ於ケル第九百六十九條ノ趣旨ト同一ナルカ故ニ別ニ茲ニ詳説スルヲ要セス
- (三) 裁判上ノ失權者ナラサルコトヲ必要トス
此條件ハ亦家督相續人ノ場合ト同シク遺産相續人ニ付テモ等シク之ヲ必要ト

スルモノナリト雖モ裁判上遺産相續人ヲシテ失權セシムルコトヲ得ルノ事由ハ家督相續人廢除ノ事由トハ全ク同一ニ非ス第九百九十八條ニ依レハ被相續人カ遺産相續人ノ廢除ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得ルハ其相續人カ之ニ對シテ虐待ヲ爲シタルカ又ハ重大ナル侮辱ヲ加ヘタル場合ニ限ルコトヲ規定セリ故ニ遺産相續人ニシテ第九百七十五條第一項第二號乃至第四號ニ掲ケタル事由アルモ被相續人ハ之カ廢除ヲ請求スルコトヲ得ス蓋シ家督相續人ハ相續ニ因リ戸主ト爲リ一家ノ統轄ヲ爲サ、ルヘカラサル者ナルカ故ニ家督相續人ニシテ第九百七十五條第一項第二號乃至第四號ニ掲ケタルカ如キ家督ヲ執ルニ適セサル事由アルトキハ之ヲ廢除セサルヲ得スト雖モ遺産相續人ハ相續ニ因リテ唯財產ノ享有ヲ得ルノミナルヲ以テ此ノ如キ理由ハ遺産相續ト相容レサルモノニ非ス故ニ第九百九十八條ハ之ヲ以テ遺産相續人廢除ノ理由ト爲サ、ルナリ又第九百九十八條ハ遺留分ヲ有スル推定遺産相續人ト云ヘリ故ニ直系卑屬ハ勿論配偶者直系尊屬ノ如キ遺留分ヲ有スル推定遺産相續人ハ之ヲ廢除スルコトヲ得レトモ遺留分ヲ有セサル推定遺産相續人即チ戸主ハ被相續

人ニ對シ虐待ヲ爲シ又ハ之ニ重大ナル侮辱ヲ加フルモ之ヲ廢除スルコトヲ得ス但被相續人ニ自己ヲ虐待シ又ハ自己ニ重大ナル侮辱ヲ加ヘタル戸主ヲシテ自己ノ遺産ヲ相續セシムルコトヲ欲セサルニ於テハ遺言ヲ以テ其財產ヲ他人ニ遺贈スルニ依リ其目的ヲ達スルコトヲ得ルカ故ニ實際ニ於テハ廢除シタルト同一ノ結果ヲ生セシムルコトヲ得ヘシ

遺産相續人廢除ノ請求其取消及ヒ廢除又ハ其取消請求中必要ナル處分ヲ爲スコトニ關スル手續ハ家督相續人ノ是等ニ關スル場合ノ手續ト同一ナリ

家督相續人ト爲ルニハ以上三條件ノ外尙ホ日本ノ國籍ヲ有スルコトヲ必要トスト雖モ遺産相續人ニハ之ヲ必要トセス蓋シ日本ノ家ノ戸主ト爲ルニハ日本ノ國籍ヲ有セサルヘカラサルハ法律ノ定ムル所ナルカ故ニ家督相續人ト爲ルニハ必スヤ日本人ナラサルヘカラスト雖モ財產ヲ享有スルハ必シモ日本ノ國籍ヲ有スルコトヲ必要トセス現ニ民法第二條ハ外國人ト雖モ法令又ハ條約ニ禁止アル場合ノ外私權ヲ享有スルコトヲ定メタル故ニ外國人モ亦遺産相續ヲ爲スコトヲ得ルナリ

第二 遺産相續人ノ順位

遺産相續人ノ順位ハ左ノ順序ニ從テモノトス

(一)直系卑屬 (二)配偶者 (三)直系尊屬 (四)戸主是ナリ

舊民法ニ於テハ直系卑屬カ遺産相續權ヲ有スルニハ被相續人ト家ヲ同シウスルコトヲ必要トシタリ蓋シ舊民法ニ於テハ純然タル財産ノ承繼ヲ目的トスル遺産相續ニ至ルマテ尙ホ長子相續ノ制ヲ採用セシモノナレバ以テ隨テ之カ相續人ト爲ル者モ亦被相續人ト家ヲ同シウスルコトヲ以テ要件ト爲シタルモノナルヘシト雖モ財産相續ニ於テ長子相續制ヲ採用スルノ必要ナキノミナラス家族制度ト關係ナキ遺産相續ニ於テ相續人ノ資格ヲ定ムルニ被相續人ト同一ノ家ニ屬スルコトヲ要件トセシハ何等ノ理由ナキモノナルコト曾テ本校ニ於ケル講義ニ於テ論シタル所ニシテ新民法ノ之ヲ改正シテ被相續人ト家ヲ同シウスルコトヲ必要トセサルコト、セルハ極メテ至當ノ改正ナリト信ス故ニ新民法ノ下ニ於テハ被相續人ノ直系卑屬ハ既ニ他家ノ戸主又ハ家族ト爲リタル後ニ於テモ尙ホ其遺産ヲ相續スルノ資格アルモノナリ

家督相續ニ於テハ兄弟姉妹又ハ其直系卑屬ハ相續ノ資格ヲ有シ而モ其順位ハ直系尊屬ニ先ツモノナルニ遺産相續ニ於テハ是等ノ者ニ相續人タル資格ヲ與ヘス故ニ直系卑屬配偶者又ハ直系尊屬ナキトキハ被相續人ノ遺産ハ常ニ戸主ノ手ニ歸シ兄弟姉妹若クハ其卑屬ノ如キハ之カ承繼ヲ爲スコトヲ得サルナリ但被相續人カ是等ノ者ヲシテ其遺産ヲ承繼セシメンコトヲ欲セハ遺贈ニ依リテ其目的ヲ達スルコトヲ得ルカ故ニ實際ニ於テハ別ニ不都合アルニ非ス

配偶者及ヒ戸主ハ常ニ一人ナリト雖モ直系卑屬及ヒ直系尊屬ハ二人以上アルコトヲ得ルモノナリ此ノ如キ場合ニ於テハ其間ニ於ケル相續ノ順位如何第九百九十四條及ヒ第九百九十六條ハ此場合ニ於ケル順位ヲ定メタリ左ノ如シ

一 親等ノ異ナリタル者ノ間ニ在リテハ其近キ者ヲ先ニス

故ニ子ハ孫ニ先チ父母ハ祖父母ニ先ツモノトス

二 親等ノ同シキ者ハ同順位ニ於テ遺産相續人ト爲ル

故ニ荷モ親等同一ナルトキハ其長幼男女嫡庶ノ如何ハ其間ヲ所ニ非スシテ共ニ同順位ニ於テ遺産相續人ト爲ルモノナリ即チ遺産相續ニ於テハ家督相續ノ

如ク一人相續制ヲ採ラスシテ共同相續制ヲ採レリ新民法カ家督相續ニ於テハ一人相續制ヲ採リ遺產相續ニ於テ共同相續制ヲ採リタルハ實際ノ事情ニ適合シ而モ相續ナルモノ、理想ト一致シタルモノト信ス

直系卑屬直系尊屬多數ナル場合ニ於テ其間ニ於ケル順位ハ右ノ如クト雖モ此順位ニ對シ直系卑屬ニ付テハ第九百九十五條ニ於テ一ノ例外ヲ定メタリ即チ遺產相續人ト爲ルヘキ直系卑屬カ相續開始前ニ死亡セルカ又ハ其相續權ヲ失ヒタル場合ニ於テハ其者ノ直系卑屬ハ法律ノ規定ニ從ヒ其者ノ順位ニ於テ遺產相續人ト爲ルモノトス直系卑屬カ其直系尊屬ノ相續順位ニ於テ相續ヲ爲シ得ルコトハ家督相續ノ場合ニ於テモ其規定アリテ既ニ其所ニ於テ説明シタルカ故ニ茲ニ再說セズ

第三節 遺產相續ノ効力

法律ハ此節ヲ分チテ三款ト爲シ第一款總則ニ於テハ遺產相續ノ効力ノ大綱目ヲ掲ケ第二款相續分ナル標題ノ下ニハ各相續人ノ相續スヘキ割合及ヒ其計算方法ヲ定メ第三款遺產ノ分割ナル所ニ於テハ相續財產ノ分割方法及ヒ分割ニ

伴フ法律上ノ効力ヲ規定セリ

第一款 總則

遺產相續人ハ相續開始ノ時ヨリ被相續人ノ財產ヲ組成セル一切ノ權利義務ヲ承繼スルモノナリ但被相續人ノ一身ニ專屬セルモノハ此限ニ在ラス
遺產相續ハ財產相續ナルカ故ニ財產ノ外ハ遺產相續人ハ之ヲ承繼スルモノニ非ス故ニ法律ハ特ニ財產ニ屬セシ一切ノ權利義務ト云ヘリ然レトモ熟考スルニ家族ノ死亡シタル場合ニ於テ其相續人ノ承繼シ得ヘキ權利義務ト云ハ、財產ヲ組成セル權利義務ノ外他ニ之ナキカ如クナルヲ以テ法律カ特ニ財產ニ屬セシ一切ノ權利義務ト云ヘルハ蛇足ニ過キサルカ如シ
茲ニ財產ニ屬セシ權利義務ト云ヘリ然ラハ遺贈ナルモノハ所謂財產ニ屬セシ權利義務ナリヤ否ヤ遺言ノ効力ハ被相續人ノ死亡ノ時ヨリ生スルモノナリ果シテ然ラハ遺贈ハ被相續人ノ財產ニ屬セシ義務ニ非サルカ如シ然レトモ其此ノ如ク論スルコトヲ得サルハ後ノ第一千二十五條カ限定承認ヲ爲シタル場合ニハ被相續人ノ債務及ヒ遺贈ヲ辨濟スヘキコトヲ豫想シタルニ據リ之ヲ知ルコ

トヲ得ヘシ限定承認ヲ爲シタル場合ニ於テ既ニ然ラハ其單純承認ヲ爲シタル場合ニ於テハ總テ遺贈ヲ辨濟セサルヘカラサルコト勿論ナリト謂フヘシ
 遺産相続人一人ナルトキハ相続財産ハ總テ此者ニ移轉スルカ故ニ此場合ニ於テハ特ニ規定ヲ設クルノ必要ナシト雖モ遺産相続人ハ家督相続人ト異ナリ同時ニ二人以上アルコトヲ得ルモノナルカ故ニ若シ遺産相続人數人アルトキハ法律ニ於テ其取得スル權利及ヒ負擔スヘキ義務ノ範圍ヲ定ムルノ必要アルナリ
 第一千二條ハ此場合ニ關スル規定ヲ設ケ遺産相続人數人アルトキハ相続財産ハ其共有ニ屬スルコトヲ定メタリ蓋シ遺産相続人數人ナル場合ニ於テハ後ニモ述フル如ク法律ハ各自ノ相続分ヲ定ム而シテ相続分トハ各自ノ受クヘキ財産ノ割合タルニ過キサルカ故ニ事實其割合ニ因リテ各自ノ受クヘキモノヲ定ムルマテハ各相続人ハ相続財産ノ全部ニ付キ其相続スヘキ割合ニ因リ權利ヲ共有スヘキモノト看做スノ外他ニ方法ナキヲ以テ右ノ如キ規定アルモノナリ
 相続財産ヲ共有スルトハ相続ニ因リテ受クヘキ權利ヲ共有ストノ意義ナリヤ又ハ權利義務共ニ之ヲ共有ストノ意義ナリヤ新民法ニ於テハ相続財産又ハ財

右何レノ場合ニ於テモ假執行ハ前裁判ノ取消サレタル限度ニ於テ其効力ヲ失フモノトス而シテ此假執行ノ効力ヲ失ハシムル判決ハ他ノ判決ト其趣ヲ異ニシテ其言渡ノミニ由リテ直チニ効力ヲ生ス(第五一〇條第一項)故ニ其判決ノ言渡アリタルトキハ債務者ハ債權者カ已ニ假執行ノ宣言ニ基キ實施シタル強制執行ノ停止ヲ求メ及ヒ已ニ爲シタル執行處分ノ取消ヲ求ムルヲ得ヘク又若シ假執行ノ宣言アル本案ノ判決ヲ取消サレタルトキハ其判決ニ基キ支拂又ハ給付ヲ爲シタルトキハ其取戻ヲ求ムルヲ得ヘキハ勿論ニシテ此取戻ニ付テハ法律ハ債務者ノ爲メニ一ノ便宜ヲ與ヘタリ即チ第五百十條第二項ノ規定是ナリ此規定ニ依レハ債務者ハ先テ假執行ノ宣言アル判決ヲ廢棄變更又ハ破毀セラレンコトヲ申立テ其判決ヲ受ケタル後更ニ支拂又ハ給付ノ取戻ヲ請求スル訴ヲ提起スルヲ要セスシテ假執行ノ宣言アル本案ノ判決ヲ廢棄變更者又ハ破毀セラレンコトヲ申立ツルト同時ニ其申立中ニ併セテ假執行ニ由リテ支拂ヒ又ハ給付セルモノヲ債權者ヨリ取戻申立テ同時ニ其言渡ヲ受クルヲ得但債務者カ右取戻ノ申立ヲ本案判決ノ不服申立

ニ關スル口頭辯論中ニ爲サ、リシトキハ特別ノ訴ヲ以テ之ヲ請求スルノ外
トキナリ

尙ホ假執行ノ宣言ニ付キ一言スヘキコトアリ他ナシ原告ノ敗訴ノ場合ニ於テ
モ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得ルヤ否ヤ是ナリ第五百一條第五百二條ヲ見
ルニ左ノ場合ニ於テハ假執行ノ宣言ヲ爲スコトアリテ假執行ノ宣言ヲ爲
スヘキ判決及ヒ訴訟ヲ掲ク此條文ヲ一讀スレハ第五百一條第一號第四號第
五號ヲ除キテハ被告ノ敗訴セル場合タルト原告ノ敗訴セル場合タルト問
ハス原告ヨリ提起セル訴訟カ右二箇條ノ他各號ニ該當スル場合ニハ假執行
ノ宣言ヲ付スヘシト解シテ差支ナキカ如シ然レトモ予ノ信スル所ニ據レハ
此問題ハ第五百十條第二項ノ規定ニ據リテ消極ノ斷定ヲ下シ原告敗訴ノ場
合ニハ假執行ノ宣言ヲ付スル事ヲ得スト解セサルヘカラス何トナレハ若シ
原告ノ敗訴セルトキハ被告ニ其訴訟費用ニ關スル判決ノ假執行ヲ爲スコト
ヲ許スモノトセハ第五百十條第二項ニ於テ原告ヨリ被告ニ對スル取戻ニ付
テモ亦同様ノ規定ナカルヘカラス然ルニ第五百十條第二項ニハ被告ノ支拂

又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡ス可
シトノミアリテ原告ノ支拂又ハ給付シタルモノ、辨濟ヲ被告ニ言渡スヘシ
トノ規定ナシ是ニ由テ之ヲ觀レハ立法ノ精神ハ假執行ノ宣言ヲ付スヘキ訴
訟ニ於テ原告ノ敗訴シタル場合ニハ原告ニ對シテ被告ノ爲メニ訴訟費用ニ
關シ假執行ノ宣言ヲ付スルコトヲ許サスト爲スニ在ルヲ推察スルニ餘アリ
尙ホ左ニ其理由ヲ詳述セシ

本案ノ請求ト共ニ訴訟費用ニ關シ假執行ノ宣言ヲ付スル所以ハ其訴訟費用
ノ主タル本案ノ請求カ假執行ヲ爲スヘキモノナルトキハ其附従タル訴訟費
用ノ請求ニ付テモ同時ニ假執行ヲ許サ、レハ原告ハ一ノ訴訟ヲ起シタルニ
過キサルニ兩度ノ執行ヲ爲サ、ルヘカラサルニ至リ原告ノ爲メニハ不便尠
カラサルヲ以テ斯ル煩累ヲ省カシムルカ爲メノミ決シテ其性質上假執行ヲ
許サ、ルヘカラサルニアラス然ルニ敗訴セル原告ニ對シテ執行スヘキモノ
ハ訴訟費用ノミニシテ其訴訟費用ノ附隨スヘキ本案ノ請求アルコトナシ故
ニ敗訴シタル原告ニ對シテ被告ノ爲メニ訴訟費用ニ付キ故ラニ假執行ヲ許ス

ノ必要ヲ見ス加之原告敗訴ノ場合ニ於テ常ニ訴訟費用ニ付キ獨立シテ假執行ヲ許ストセハ第五百二條第五號ノ規定ニ矛盾スルノ結果ヲ生スヘシ第五百二條第五號ノ規定ニ依レハ請求ノ金額又ハ價額ニ於テ廿圓ヲ超過セサル訴訟ニ限リ申立ニ因リテ假執行ノ宣言ヲ付スルコトヲ得ヘキナリ然ルニ若シ原告ノ負擔スヘキ訴訟費用ニ付テ假執行ノ宣言ヲ付スヘキモノトセハ其訴訟費用額二十圓ヲ超過スル場合ニ於テモ仍ホ假執行ノ宣言ヲ付セサル可カラス是レ明カニ第五百二條第五號ノ規定ニ背馳スルモノナリ

次ニ假執行ヲ命スル判決ニ對シテ故障ヲ申立テ又ハ上訴ヲ提起シタル場合ノ處分ニ付テ一言スヘシ

敗訴ノ被告カ假執行ノ宣言アル判決ニ對シ故障又ハ上訴ヲ爲シタルトキハ固ヨリ其判決ニ服從シテ執行ヲ受クルノ意思ナキコト明カナルノミナラス後ニ其判決ノ取消サルコトナキヲ保セス而シテ此場合ニ於テ假執行ハ當然消滅スヘキニ非サレハ一面ニ於テ右敗訴者ヲ保護スルノ規定ナカルヘカラス今第五百十二條第五百條ニ依レハ裁判所ハ債務者トシテ敗訴シタル不

服申立人ノ申立ニ因リテ臨機ニ左ノ如キ處分ヲ爲スコトヲ得

イ 債務者不服申立人ニ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスモテ強制執行ヲ一時停止スルコトヲ命スルコト

但保證ヲ立テシメスシテ強制執行ノ一時停止ヲ命スルハ執行ヲ爲セハ債フコト能ハサル損害ヲ受クヘキコトヲ債務者ニ於テ疏明スルトキニ限ル

ロ 債務者ニ保證ヲ立テシメテ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ヲ命スルコト

ハ 債權者ニ保證ヲ立シメテ強制執行ヲ爲スヘキコトヲ命スルコト

右ノ處分ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判スルコトヲ得而シテ其裁判ニ對シテハ何等ノ不服申立ヲ爲スコトヲ得ス

第三款 外國裁判所ノ判決

外國裁判所ノ判決ハ執行判決ヲ經テ始メテ強制執行ヲ爲スコトヲ得ルモノトス執行判決トハ外國裁判所ノ判決カ適法ナルコト又ハ仲裁判斷ノ執行スルコトヲ得ヘキモノタルコトヲ宣言スル内國裁判所ノ形式的判決ナリ(第五一四條第一項第八〇二條第一項形式的判決ト云フカ故ニ外國裁判所ノ判決ニ付キ請

求ノ原因タル事實ノ有無及ヒ外國ノ法律ニ於テ保護スル請求ナリヤ否ヤ等其裁判ノ當否ヲ調査セシメテ下ス所ノ判決ナリ
 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ニ付テハ何カ故ニ執行判決ヲ必要トスルヤ蓋シ裁判ハ司法權活動ノ結果ナリ而シテ司法權ハ國家統治權ノ一部トスルチ國家ハ其臣民ヲ保護スル爲メ司法權ヲ行使スルノ必要アリ故ニ凡ソ獨立ノ國家ハ其國土及ヒ國民ニ對シテ外國司法權ノ支配ヲ受ケサルヲ原則トス換言スレハ獨立國家ハ自己固有ノ統治權ニ據リ自己ノ領土及ヒ其領土内ニ在ル人民ヲ保護スルノ權利ヲ有シ決シテ外國主權ノ容喙ヲ許スヘキモノニアラス若シ之ニ反シテ外國主權ノ行使ヲ自己ノ領土及ヒ國民ニ許ストキハ其獨立國ノ實アルモノト謂フヘカラス然ラハ則チ外國裁判所ノ判決ヲ我統治權ノ下ニ在ル領土及ヒ臣民ニ執行セシムルハ國家ノ獨立ヲ傷クルモノナリト謂ハサルヘカラス然レトモ今世ニ於テハ昔日ト異ナリ各國相互ニ和親交通ノ條約ヲ結ビテ彼我人民ノ相交通スル日ニ月ニ頻繁ナルニ拘ハラス外國裁判所ノ判決ヲ絶對的ニ内國ニ於テ執行スルヲ許サストセハ商業上ハ勿論其他國民ノ利益ヲ間

接ニ妨害スルノ結果ヲ生スヘシ故ニ一方ニハ國民ノ便益ヲ達センカ爲メ又他方ニハ獨立國家タル體面ヲ毀損セザランカ爲メ法律ニ執行判決ノ規定ヲ設ケ以テ外國裁判所ノ判決ノ効果ヲ内地ニ於テ收ムルノ便ヲ得セシム然レテ此外國裁判所ノ判決ニ執行力ヲ付與スルモノハ則チ内國裁判所ノ下スヘキ執行判決ニシテ外國裁判所ノ判決自體ハ獨立シテ内國ニ執行力ヲ有セス我國統治權ノ活動即チ執行判決ノ力ニ由リテ始メテ執行力ヲ生スルモノナリ是レ即チ外國裁判所ノ判決ヲ直チニ我國ニ於テ執行セシムルモノニアラサレハ決シテ國家ノ獨立ヲ毀損スルモノニアラサルノミナラス反テ之カ爲メニ國際間ノ便宜ヲ得ルモノト謂フヘキナリ
 執行判決ヲ求ムル訴訟手續 執行判決ヲ求ムルニハ訴ヲ以テス其起訴ノ方法口頭辯論ニ於ケル訴訟手續訴訟物ノ價格ニ應ズル印紙ノ貼用等ハ總テ通常ノ訴ノ場合ト異ナルコトナシ其一定ノ申立トシテハ某外國裁判所ノ判決ニ因リ強制執行ヲ許スノ判決アランコトヲ申立ツル旨ヲ記載スヘキナリ
 次ニ事物ノ管轄ニ付テモ通常ノ訴ニ於ケルカ如ク我裁判所構成法ノ規定ニ從

フ而シテ訴訟物ノ價額ノ算定ハ執行判決ヲ求ムル訴ヲ起スル時ニ於テ執行スルコトヲ得ヘキ請求ノ價額ニ依ル故ニ例ヘハ外國裁判所ニ訴訟提起ノ當時其目的物タル羅紗ノ價カ一反ニ付キ百圓ナリシニ執行判決ヲ求ムル當時ハ價額下落シテ一反八十圓ト爲リタルトキハ一反八十圓ノ割合ニテ見積ルヘキモノナリ

土地ノ管轄ニ付ラモ亦通常ノ規定ニ從フ故ニ其訴ヲ管轄スルハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所トス若シ債務者ニ普通裁判籍ナキトキハ請求ノ目的物所在地ノ裁判所ヲ以テ管轄裁判所トス(第五一四條第二項)

執行判決ヲ得ルニ必要ナル條件 執行判決ヲ得ルニハ左ノ條件ヲ具フルヲ必要トス(第五一五條第二項)

第一 外國裁判所ノ下セル判決ノ確定シタルコトヲ證明スルコト

外國裁判所ノ判決ノ確定トハ其外國ノ法律ニ依リテ確定シタルヲ謂フ故ニ外國ノ法律ニ於テ判決ノ確定前ニ執行ヲ許ス場合ニテモ其判決カ外國ノ法律ニ

從テ未タ確定セサルトキハ我裁判所ハ執行判決ヲ與フルコトヲ得ス故ニ外國判決カ縱令其國ノ法律ニ從ヒ假執行ヲ爲スコトヲ得ルトキト雖モ未タ之ニ執行判決ヲ與フルコトヲ得サルナリ

第二 外國裁判所ニ於テ下シタル判決ノ事項カ我國ノ法律ニ依リ強制執行ヲ許スモノナルコト

故ニ吾人ノ身體又ハ自由ヲ束縛スルニアラサレハ執行スルヲ得サル判決例ヘハ債務者ノ拘留ヲ命スル判決被告ニ婚姻ヲ命スル判決又ハ人身ノ賣買ヲ命スル判決ノ如キ外國裁判所ノ判決ニハ執行判決ヲ與フヘカラサルモノトス

第三 裁判管轄ニ關シ本邦ノ法律ニ牴觸セスシテ外國裁判所カ判決ヲ爲シタルコト

是レ第五百十五條第二項第三號ノ規定ヲ裏面ヨリ解釋シタルモノナリ同法文ニ曰ク本法ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管轄權ヲ有セサルトキト此條文ノ解釋ニ付テハ學說未タ一定セサルカ如シ故ニ予ハ今一ニ學說ヲ擧ケテ之カ論評ヲ試ミ併セテ予ノ見解ヲ陳述スヘキ

或學者ハ此條項ニ所謂管轄トハ各一國內ニ於ケル裁判管轄ノ謂ニアラス一般ニ外國裁判所カ國際法ノ法理ニ於テ管轄ヲ有スヘキモノタルヲ謂フナリ故ニ各一國內ニ於ケル裁判管轄ノ規定ニ背キ下シタル判決ト雖モ執行判決ヲ與フルヲ妨ケサルモ各國カ其領土内ニ住所若クハ居所ヲ有スル外國人ニ對シテ管轄權ヲ有シ又ハ契約ノ履行地若クハ不動産ノ所在地タルニ由リテ管轄權ヲ有スルカ如キハ國際私法ノ法理トシテ自ラ一定セル所ニシテ若シ外國ノ判決カ此一般ノ管轄ニ關スル法理ニ違背シテ下シタルモノナルトキハ國際法上之ヲ是認スヘカラス隨テ其外國判決ニ基キ執行判決ヲ求ムル訴ハ之ヲ却下スヘシト云ヘリ此說明ニ從フトキハ甲外國ニ在ル不動産ニ關シテ起レル訴訟ノ判決ヲ乙外國裁判所ニ於テ判決シタルトキハ此判決ニ基キ我國ニ於テ執行判決ヲ求ムルヲ得スト解セサルヘカラス何トナレハ國際法ノ原則トシテ各獨立國ハ其國內ノ不動産ニ關スル訴訟ニ付テハ自ラ裁判管轄權ヲ有シ前例ノ場合ニ於テハ甲外國裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ事件ヲ乙外國裁判所ニ於テ判決ヲ爲シタルニ由リ其乙外國裁判所ハ國際法ノ原則ニ反シテ判決ヲ與ヘタルキノト斷定

セサルヘカラヤレハナリ
 次ニ或論者ハ曰ク凡ソ管轄ニ付テハ我民事訴訟法第一編第一章ノ始メニ規定アリ故ニ裁判所ニ訴ヲ起シテ法律ノ保護ヲ受ケントセハ此管轄ニ關スル規定ニ從ヒテ起訴セサルヘカラス然ルニ若シ其管轄ニ關スル法律ニ違背シテ外國裁判所ニ於テ裁判ヲ爲シタルトキハ此裁判タルヤ我民事訴訟法ヨリ觀察スレハ初ヨリ裁判ナキト同一ナリ隨テ本邦人ハ之ニ服從スル義務ヲ負フモノニアラス故ニ外國裁判所ノ判決ニ執行力ヲ有セシメントスルニハ本邦ノ法律ニ照シテ其外國裁判所カ管轄權ヲ有スルヤ否ヤヲ調査スルヲ必要トシ若シ本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管轄スヘキモノニアラサルトキハ執行判決ヲ求ムル訴ヲ却下スヘシト此說タルヤ若シ本邦ノ裁判管轄權ヲ侵害セラレタルニアラサル場合例ヘハ今夫タル甲外國人カ其妻タル乙外國人ニ對シ離婚ヲ求ムル訴ヲ乙外國ノ裁判所ニ起シ目的ノ如ク離婚ノ判決ヲ得タル後我國ニ於テ此判決ノ執行ヲ求メン爲メ我國ノ裁判所ニ執行判決請求ノ訴ヲ提起シタル場合ニ於テモ尙ホ我國裁判所ハ我人事訴訟手續法ニ離婚ノ訴ハ夫カ普通裁判管轄ヲ有

土地ノ地方裁判所ノ管轄ニ專屬スト規定スルノ故ヲ以テ即チ乙外國裁判所ノ
 判決ハ管轄ニ關スル我國ノ法律ニ反スルモノトシ右執行判決ヲ求ムル訴ヲ却
 下スヘシトノ論斷ヲ首肯スルニ在リトセハ是レ予ノ贊同スル能サル所ナリ予ノ
 信スル所ニ據レハ外國裁判所ノ下シタル判決ニシテ尙モ我國ノ裁判所カ我國
 ノ法律ニ從ヒテ有スル管轄權ヲ侵害シタルモノニアラサル以上ハ我國裁判所
 ハ之ニ執行判決ヲ與ヘテ不可ナキナリ故ニ前述第一例及ヒ第二例ニ於ケル乙
 外國裁判所ノ下セル判決ニモ亦執行判決ヲ與フルコトヲ得ヘシト信ス何トナ
 レハ右ノ場合ニ於テ外國裁判所ノ判決ニ係ル事項ハ我國ノ法律カ之ヲ我國裁
 判所ノ管轄ニ屬セシメタルカ爲メ外國裁判所管轄權ヲ有セザルニアラサレハ
 我國裁判所ノ管轄權ハ毫モ侵害ヲ受ケタルニ非サレハナリ之ニ反シテ我國内
 ノ不動産ニ關シテ外國裁判所ニ起レル訴訟ニシテ我民事訴訟法第二十二條ニ
 該當スル場合ニ外國裁判所ノ與ヘタル判決ニハ我國ニ於テ執行判決ヲ付與ス
 ルコトヲ得ス何トナレハ右不動産ニ關スル訴訟ハ同條ニ依リテ不動産所在地
 ノ裁判所專ラニ管轄スヘキヲ以テ外國裁判所ノ下シタル判決ハ我民事訴訟法

者ノ豫メ期スル所ニシテ又能ク其意思ニ適スルモノト云フヘシ
 (二) 返還ノ場所 特約ナキ限リハ受寄物ノ保管ヲ爲スヘキ場所ニ於テ返還セザ
 ルヘカラス(第六六四條)蓋シ物ノ性質ニ因リテハ其場所自ラ一定セラルヘク若
 シ性質ノ特ニ定ムヘキモノナキトキハ畢竟受寄者ノ住所ハ返還ノ場所トナル
 若シ又受寄者カ寄託者ノ承諾ヲ得スシテ保管ノ場所ヲ變更シタルトキハ其保
 管ヲ爲スヘカリシ場所ニ其物ヲ持チ行キ返還ス可キモノトス但シ特例トシテ
 受寄者カ正當ノ事由ニ因リテ受寄物ヲ轉置シタルトキハ其物ノ現在ノ場所ニ
 於テ返還ヲ爲スコトヲ得可シ
 受寄物ノ性質又ハ瑕疵ニ因リテ受寄者カ損害ヲ蒙リタルカ又ハ受寄物ニ付キ
 保管ノ費用ヲ支辨シタルトキハ其損害ノ賠償又ハ費用ノ辨償ヲ受クルマテハ
 留置權ノ通則ニ因リテ受寄物ヲ留置スルコトヲ得從テテ返還ヲ拒絕スルコト
 ヲ得然レトモ寄託ハ權利移轉ノ行爲ニアラサルヲ以テ寄託者カ目的物ノ所有
 者タルコトハ必要條件ニアラス故ニ受寄者ハ受寄物カ寄託者ノ所有物ニアラ
 サルノ理由ヲ以テ目的物ノ返還ヲ拒ムコトヲ得ス

第三 受寄者カ受寄物ヲ自ラ使用シ又ハ第三者ヲシテ保管セシムルニ付テハ
 特ニ寄託者ノ承諾ヲ要ス(第六五八條舊民法取得第二一三條舊民法)右ノ場合ニ付テハ第一ニ寄託ハ全ク寄託者ノ利益ノ爲メニ取結フ契約ナレバ、
 受寄者ノ利益ニ目的物ヲ使用セシムルコトハ契約ノ目的ニ反スルナリ若シ其
 目的ニシテ是レニ在リトスレハ寄託ニアラスシテ使用貸借トナルナリ故ニ目
 的物ヲ使用セント欲セハ特ニ寄託者ノ承諾ヲ經サルヘカラス第二ニ又寄託ハ
 受寄者其人ノ平素ニ於ケル注意ノ精粗保管ノ巧拙等ヲ見テ而シテ後受寄者其
 人ニ着眼シテ取結フ契約ナレハ第三者ヲシテ代リテ保管セシムルコトモ寄託
 者ノ最初ノ意思ニアラサルナリ故ニ是レ亦特ニ寄託者ノ承諾ヲ要スヘキハ當
 然ナリトス
 若シ承諾ヲ受ケ第三者ヲシテ代リテ保管ヲ爲シタル場合ニ於テハ受寄者
 ハ保管者ノ選定及監督ニ付テハ寄託者ニ對シテ責任ヲ負ハサルヘカラス若シ
 其保管者ハ寄託者ノ指名シタル者ナルトキハ其保管者ノ不適任又ハ不誠實ナ
 ルコトヲ知リシニモ拘ハラズ之ヲ告ケサリシ場合或ハ其保管者ヲ解任スルコ

トヲ怠リタルトキニ限り責任ヲ負フヘキモノトス
 而シテ受寄者ト其保管者トノ間ニハ直接關係ヲ生ス即チ保管者ハ寄託者ニ對
 シテ受寄者ト同一ノ權利義務ヲ有ス要スルニ此場合ニ於テハ第三者ハ恰モ代
 理關係ニ於ケル複代理人ト同一ノ地位ニ立ツモノナリ故ニ受寄者ハ代理人ト
 シテ責任ヲ負擔シ保管者ハ複代理人トシテノ權利義務ヲ負擔スルコト、ナル
 第四 若シ受寄物ニ付キ權利ヲ主張スル第三者カ受寄者ニ對シテ訴追又ハ差
 押ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク之ヲ寄託者ニ通知セサルヘカラス
 即チ訴追ハ之ヲ告知シテ參加セシメ又差押ニ付テ異議ノ訴ヲ起シテ差押ヲ解
 除セシムルノ餘地便宜ヲ寄託者ニ與ヘンカ爲メナリ
 第五 收受シタル果實ヲ返還シ又ハ取得シタル權利ヲ移轉セサルヘカラス
 第六 受寄者カ寄託者ニ引渡スヘキ金銭又ハ收受シタル金銭ヲ自己ノ爲メニ
 使用シタルトキハ之ヲ賠償スヘキハ勿論其日以後ノ法定利息ヲ支拂フ
 コトヲ要ス
 第二項 寄託者ノ義務

寄託ハ本則トシテ無償契約ニシテ特約アル場合ニ於テノミ寄託者ハ報酬支拂ノ義務ヲ負擔スルモノナルカ故ニ無償寄託ノ場合ニ於テハ寄託者ハ契約ノ成立ト共ニ何等ノ義務ヲモ負擔スルコトナシ只契約成立後ノ事實若クハ寄託者ノ過失懈怠ニ因リテ或ハ寄託物保管ノ費用ヲ支拂ヒ或ハ受寄者ノ支拂ヒタル費用並ニ其利息ヲ辨償シ若クハ受寄者カ寄託物保管ノ爲メ必要ナル債務ヲ負擔シタルトキハ之ヲ辨償スルカ如キ種々ノ義務ヲ負擔スル場合ナキニアラサルモ此等ハ既ニ委任契約ニ付キ委任者ノ義務トシテ説明シタル所ト同一ナレハ茲ニ之ヲ述ヘス唯寄託者ノ義務トシテ特ニ説明スヘキ所ノモノハ即チ第六百六十一條ノ規定ニシテ受寄物ノ性質又ハ瑕疵ヨリ生シタル損害ニ付テ寄託者ヨリ受寄者ニ對スル賠償問題ナリ

元來寄託ハ寄託者ノ利益ノ爲メニ目的物ヲ保管スルモノナレハ受寄者カ其之ヲ保管スル爲メニ損害ヲ蒙リタル場合ニ於テ寄託者ヨリ其損害ヲ賠償セサルヘカラサルコトハ當事者ノ特約ヲ缺タスシテ條理上既ニ當然ノコトナリトス然レトモ荷クモ損害アルヤ常ニ寄託者ニ賠償ノ責任アリトスルハ寄託者ヲ遇

スルニ寛嚴其宜キヲ得タルモノニアラス故ニ法律ハ此賠償責任ノ範圍ヲ制限セリ

第一其損害ハ寄託物ノ性質又ハ其物ノ瑕疵ヨリ生シタルモノナラサルヘカラス然ラサレハ賠償ノ責任ナシ

第二假令目的物ノ性質又ハ瑕疵ヨリ生シタル損害ナリト雖モ寄託者ニ於テ其性質又ハ瑕疵ヲ知レルカ若クハ過失ニ因リテ之ヲ知ラサル場合ニ於テハ賠償ノ責任ヲ生セス

第三假令寄託者ニ於テ性質又ハ瑕疵ヲ知り又知ラサル過失アルモ受寄者ニ於テ之ヲ知レルトキハ尙ホ賠償責任ナシトセリ何トナレハ受寄者ニ於テ其物ノ性質ヲ知り又ハ其瑕疵ヲ知レル以上ハ因テ被ルヘキ損害モ素ヨリ豫想シ得ラルカコトナレハ隨意ニ寄託ノ申込ヲ拒絕スルコトヲ得然ルニ之ヲ知レルニモ拘ハラス之ヲ承諾シタル以上ハ其損害ハ自ラ招ク所ニシテ又自カラ期スル所ト云ハサルヘカラス是レ其理由ナリ然レトモ又一面ヨリ觀察シテ受寄者ノ利益ヨリ看レハ此制限ハ受寄者ノ利益ヲ顧ミサル點ニ於テ立法上ノ批難ナキニ

アラス寄託ニ付テハ此他ニ説明スヘキモノナシ其終了原因ノ如キハ一般ノ規定ニ依ルヘキナリ

第十二節 組合

民事ト商事トヲ問ハス共同營業ヲ目的トスルモノハ從來一般ニ之ヲ會社ト稱シ來リ法典草案モ亦本節ニ會社ナル表目ヲ採用セルカ法典正文ハ更ニ之ヲ組合ナル文字ニ修正シタリ是レ他ナシ法律ハ會社ナル語ヲ以テ商事社團專用ノモノトシ民事上ノ團體ニハ組合ナル別名ヲ附シテ彼此混同スルコトナキヲ望メルナリ(商法第四二條第一八條參照)

會社又ハ組合ナル語ハ從來二様ノ意義ニ使用セラルル數人共同シテ或事業ヲ營ム場合ニ於テ其契約自體ヲ指シテ之ヲ會社又ハ組合ト稱スルコトアリ或ハ又其契約ニ依リテ成立スル所ノ團體ヲ指シテ會社又ハ組合ト稱スルコトアリ唯其之ヲ使用スル場合ト前後ノ文詞トニ照合シテ意義ノ甲乙ヲ判別スルノミ然レトモ法律ハ勉メテ其使用ノ意義ヲ表明センコトヲ欲シ本節ニハ單ニ組合ト稱スルニモ拘ハラズ本節中各條ノ規定ニ付テ見ルトキハ單ニ組合ト稱スル

場合ハ常ニ團體其者ヲ指稱スルカ如ク而シテ契約ヲ指稱スル場合ニハ特ニ組合契約ナル文字ヲ使用セラレアルヲ知ル可シ

第一款 組合契約ノ本義並ニ性質

茲ニ特ニ組合契約ノ本義ト標題スルモ亦組合其者ト區別センカ爲メナリ然レトモ組合其者ハ組合契約ニ依リテ成立スル團體ナルカ故ニ組合契約ノ要件ハ即チ組合其者ノ成立要件ナラサルヘカラス所謂組合契約トハ各當事者カ出資ヲ爲シテ共同事業ヲ營ムコトヲ約スルモノナリ又之ヲ約スルニ因リ効力ヲ生スル契約ナリ(第六六七條)故ニ其契約ハ各當事者ノ意思表示ノミニ因リテ成立シ又各當事者ハ相互ニ出資ヲ爲スノ義務ヲ負擔スルカ故ニ契約トシテハ常ニ諾成雙務且有價ノモノナルコト疑ナシトス
右ノ本義ニ付テ見レハ組合契約ハ其要件トシテ
第一共同事業ヲ營ムコトヲ目的トスルモノナルコトヲ要ス
第二之ヲ營ムカ爲メニ各當事者即チ各組合員ハ必ス出資ヲ爲スコトヲ要ス
以下順次之ヲ説明セン

第一 組合ノ目的タル共同事業ハ必スシモ營利ヲ目的トスルモノニ限ラス假令利益ヲ收ムルノ目的ニアラザルモ其事業カ各組合員ニ共通ノモノナリ以上ハ矢張共同事業トシテ契約ノ目的タルコトヲ妨グス是レ從來ノ立法例ト全ク相違スル所ニシテ舊法ノ如キハ組合契約ハ必ラス營利ヲ目的トセサルヘカラストセリ然レトモ新法ハ既ニ總則ニ於テ民法上所謂法人ナルモノモ必ラスモ利益ヲ目的トスルモノニ限ラレス第三四條而シテ此民法上ノ法人ハ主トシテ組合契約ニヨリテ生スル處ノモノナレハ契約ノ目的ヲ營利事業ニ限ラサルハ法典ノ主義ニ於テ前後一貫スル所ナリトス去レハ要スルニ此組合契約ノ目的タル事業ニ付テノ制限トシテハ唯其事業タルヤ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサルコトヲ要スルノ一點ニ存ス可シ

然レトモ其目的タル事業ハ必ラス共同ノ事業ナラサルヘカラス換言スレハ其事業ニ付テ各組合員ハ利害關係ヲ共ニスルモノナラサルヘカラス利害關係共通ニシテ初メテ其事業ハ共同事業ト云フコトヲ得可シ故ニ其結果トシテハ各組合員ハ契約ノ趣旨ニ從ヒ直接又ハ間接ニ其事業ニ努力セサルヘカラス又其

反對ニ直接又ハ間接ニ其事業ノ成功ヲ妨クヘキ行爲ヲ爲スコトヲ得ス若シ其事業カ營利ノ事業ナレハ其利益ハ必ラス之ヲ各組合員ニ配當シ又其損失モ各自之ヲ分擔セサルヘカラス(第六七四條)或ハ契約ノ定ムル所若クハ法律ノ規定ニ依リ其利益分配ノ割合ノ不均一ナルコトアリトスルモ其不均一ハ敢テ間フ所ニアラス只組合員中ノ或者カ利益分配ヲ受ケルモ曾テ損失ヲ負擔セス又ハ損失ハ之ヲ分擔スルモ利益ノ配當ヲ受ケサルモノトスルカ如キハ則チ組合員間ニ利害共通ノモノニ非サルカ故ニ之ヲ以テ共同事業ト云フコトヲ得ス(舊民法取得第一三八條參照)

第二 各組合員ハ必ス出資ヲ爲スコトヲ要ス

所謂出資トハ即チ共同事業ヲ營ムカ爲メニ各組合員カ相互ニ負擔スル所ノ給付ニシテ即チ事業ヲ營ムニ付テノ原動力タリ原資トナル所ノモノナリ一事業ヲ計畫スルニ付テハ必スヤ勞力費用ノ相伴フモノトセハ此組合員ノ出資ノ義務ハ共同事業ヲ營ムニ於テ必要ノ條件ナルコト論ナシ

然レトモ組合員ハ如何ナル物ヲ出資ト爲ス可キヤ法律ハ此點ニ付テハ明文上

殆ント何等ノ制限ヲ設ケス故ニ動産不動産ノ所有權金錢ノ所有權モ包含スル
 コト、知ル可シハ勿論財産上ノ權利ハ皆以テ出資ノ目的ト爲スコトヲ得可シ
 加之人ノ技術又ハ勞力ノ如キモ亦出資ノ目的ト爲スコトヲ妨ケス(第六六七條
 第二項)蓋シ勞力技術ノ如キハ直ニ之ヲ以テ財産ト稱スルコトヲ得ナルモ而カ
 モ亦容易ニ金錢ニ評價シ得可キカ故ニ他ノ財産權ト同シク出資ノ目的タルコ
 トヲ得ルモノトス唯既ニ出資ト云フ或ハ金錢其他ノ財産權ニ限ラル、カ如キ
 感ナキニアラサルカ故ニ特ニ法律ノ明文ヲ要セサルナリ

出資ノ目的物ニ付テ從來顯著ナル問題ハ人ノ信用モ出資ノ目的物トナスコト
 ヲ得ルヤ否ヤニアリ

本問題ニ對シテハ予輩ハ少ナクトモ民法上ノ解釋問題トシテ消極ノ論定ニ左
 祖セサルヲ得ス(一)人ノ信用ハ本來一定不變ノモノニアラス一人カ一ノ組合ニ
 加盟スル當時ノ信用ハ後ニ他ノ組合ニ加盟スルニ至リテ俄然失墮スルナキヲ期
 セス出資ハ定マリタルモノナラサル可カラス而カモ金錢的ニ評價シ得可キモ
 ノナラサル可カラストセハ信用ハ到底此性質ヲ欠カスルモノタリ(二)法律ハ勞

務ニ付テ特ニ明文ノ出資ト爲スコトヲ得ル旨ヲ規定セリ是レ豈ニ一面ニ於テ
 人ノ信用ヲ出資中ヨリ排除スルモノニ非スト云ハンヤ然レトモ此論定ニ對シ
 テハ反對議論モ亦唱道セラル特ニ商法上ノ問題トシテ頗ル反對議論ノ勢力ア
 ルヲ見ル可シ

出資ノ種類ハ素ヨリ契約ノ定ムル所ニ依ル然レトモ必スシモ各組合員ヲ通シ
 テ同種類ノモノナルコトヲ要セス又各組合員カ悉ク其出資ノ均一ナルコトモ
 必要トセス故ニ組合員中ノ一人カ不動産ヲ出資シ他ノ一人ハ金錢其他ノ物ヲ
 出資トスルモ又甲組合員ハ金壹万圓ヲ出資シ乙組合員ハ僅ニ一千圓ヲ出資ス
 ルモ自由ナリトス第六七四條明カニ之ヲ認ム(只法律ノ希望スル所ハ多少ト雖
 モ各組合員ノ出資ヲ要スル一事ノミ若シ何等ノ出資ヲモ爲サスシテ利益ノ配
 當ヲ受クルトキハ純然タル一ノ贈與ニシテ組合契約ヲ成サス

組合員ニ於テ出資ノ義務ヲ怠リタル場合ハ一般ノ通則ニ從ヒ組合員ハ遲滯ノ
 責ニ任スルノミナラス第六百七十九條第六百八十條ノ規定ニ依リテ其組合員ノ
 除名ノ理由トナルヘク又第六百八十三條ノ適用トシテハ組合全體解散ノ事由ト

モナルコトアリ加之若シ出資物カ金錢ナル場合ニハ其拂込ノ遅延ハ唯ニ遲延利息ヲ負擔セシムルノミナラス其利息以上ニ事實損失アリタル以上ハ併セテ損害ヲモ賠償セサルヘカラス其理由ハ(第一)共同事業ノ爲メニ出資ノ義務ヲ負擔シタルニ其義務不履行ノ爲メニ事業ノ全體ニ不利益ヲ及ホサラシムルカ爲メナルト(第二)金錢以外ノ物ノ出資ヲ怠リタル場合ハ其組合員ハ遲滞ノ責ニ任シ通常之ヨリ生スヘキ一切ノ損害ヲ賠償セサルヘカラス(通則然ルニ金錢ヲ出資トナシタル者ニ限り遲滞利息ノ外義務ナシトセハ目的物ノ如何ニ因リ賠償責任ノ程度ニ不權衡ヲ見ル可キカ故ナリ

終リニ注意スヘキハ組合員ノ義務トシテハ單ニ出資ノ義務ノミハ止マラス而カモ契約ノ要件ヲ爲ス主要ノ義務ナルカ故ニ茲ニ説明セルナリ其他ノ義務ニ至リテハ特ニ列叙シテ之ヲ説明スルノ要ナシ

第二款 組合財産及ヒ組合員ノ持分

前述ノ如ク組合ハ組合契約ニ因リテ生スル團體ニシテ各當事者間ノ契約關係ニ外ナラサレハ組合共者ハ獨立シテ當然權利義務ノ主體トナルモノニアラス

(唯法律規定ニ依リテ特ニ法人タル資格ヲ認メラレテ始メテ獨立ノ人格ヲ得始メテ債權債務ノ主體トナルノミ)從テ組合共者ノ所有ニ係ルヘキ財産ナルモノナシ所謂組合財産トハ即チ各組合員ノ共有財産ニ外ナラス(第六六八條)而シテ此共有財産ヲ組成シテ主タル部分ヲ占ムルモノハ實ニ各社員ヨリ醸出スル出資ナリトス故ニ例ヘハ甲組合員カ出資トシテ不動産ノ所有權ヲ差出ストセハ其不動産ハ以後全組合員ノ共有物トナリ又乙組合員カ或物ノ使用權ノミヲ出資トシタリトセハ其使用權ニ付各組合員ハ共同ノ權利者トナリ又或ハ丙組合員カ勞務ヲ出資トストセハ他ノ組合員ハ丙ニ對シ勞務ニ服セシムルノ共同債權ヲ有スルコトトナル可シ去レハ財産ヲ出資セル場合ニハ其組合員ト他ノ組合員トノ間ニ權利ノ讓渡アリタルモノニ外ナラサレハ一般ノ規定ニ從ヒテ權利ノ移轉ニ必要ナル行爲ヲ爲スコト勿論ナリトス

斯ノ如ク組合財産ハ各組合員ノ共有財産ニ外ナラサルカ故ニ所謂組合員ノ持分ナルモノモ畢竟此組合財産ニ對シテ有スル不可分の共有權ノコトニ外ナラス既ニ不可分のナリ故ニ後日組合解散スルモ特約ナキ限りハ各組合員ハ自

已ノ出資物ヲ取戻スコトヲ得ス
 然レトモ組合員ノ持分ハ組合ノ繼續スル限りハ其實價全ク不確定ノ境遇ニア
 ルモノト云ハサルヘカラス何トナレハ各組合員カ出資ヲ共同シテ或事業ヲ營
 ムモ事業ノ成蹟ノ良否ニアリテハ共同資本ハ絶ヘス増減シ行ク可キカ故ニ組
 合ノ損益ハ組合ノ解散ノ日ニ至リ精算ヲ遂ケタル上ニアラサレハ之ヲ知ルコ
 トヲ得ス精算ノ上組合財産カ共同資本ヲ超過スルトキハ即チ利益ヲ爲シタル
 モノナリ之ニ反シ組合財産カ出資ノ總額ヨリモ減少シ又ハ出資皆無トナリタ
 ルトキハ其組合ハ即チ損失シタルモノナリ故ニ組合ノ損益ハ此時ニ於テ始メ
 テ定マリ組合員ノ持分モ始メテ其實價ヲ知ルコトヲ得可シ故ニ茲ニ組合員ノ
 持分ト云フモ或ハ組合ノ解散ノ時ニ於ケル組合員ノ受クヘキ利益若クハ分擔
 スヘキ損失ノ割合ト云フモ結局ハ同一ナリ
 去レハ其損失又ハ利益ノ分配ハ如何ニ之ヲ定ムルカ即チ組合員ノ持分ナルモ
 ノハ如何ニ之ヲ定ムルカ通常多クノ場合ニ於テハ組合契約ニ豫メ之ヲ定ムルモ
 又時トシテハ其後ノ契約ニ於テ之ヲ定ムルコトアリ然レトモ當事者カ契約ノ之

ヲ定メサル場合ニ於テハ法律ノ定ムル所ニ依ラサルヘカラス但法律ノ定ムル
 所モ普通ノ場合ニ於ケル當事者ノ意思ニ準由セルモノニ外ナラス去レハ第一
 ニ組合員カ損益分配ノ割合ハ各組合員ノ出資ノ價額ニ應シテ之ヲ定メ第二ニ
 單ニ利益又ハ損失ニ付テノミ當事者カ割合ヲ定メタルトキハ其割合ハ利益及
 損失ニ共通ノモノト推定ス蓋シ何レノ場合ニ於テモ出資額ノ多少ハ組合ニ與
 フル利益ノ多少ト比例ス可キカ故ニ出資額ノ多少ニ因リ利益損失ノ配當割ヲ
 定ムルハ當事者間ノ公平ヲ維持スル所以ナレハナリ
 出資ヲ標準トシテ損益ノ分配法ヲ定ムルハ金錢其他ノ財産ノ出資ニ付テハ何
 等ノ困難ナシ然レトモ勞務ノ出資ニ付テハ從來學說立法例共ニ見解ヲ異ニス
 ルモノアリ現ニ佛法ニハ技術勞力ヲ出資ト爲シタル組合員ノ持分ハ他ノ物ヲ
 出資トシタル組合員中尤モ少額ナル出資者ノ持分ニ準スヘキモノトセリ此規
 定ハ一刀兩斷ノ規定ニシテ適用上頗ル便宜アル可シト雖モ技術勞力ハ人ニ因
 リテ異ルノミナラス其組合ノ目的ニ因リテハ或ハ必要唯一ノモノナルコトア
 リ又反對ニ其組合ニ取リテ左程必要ナル出資ト認ムルコト能ハサルモノアル

組合

ヘシ其性質ニ種類ニ決シテ道理上一概ニ斷定シ得ヘキモノニアラス或佛法律學者ノ如キハ此規定ニ反對シ肇ロ勞務ハ組合員中最多額ノ出資ニ準スヘキモノナリトノ極端論ヲ爲スモノアリ是レ亦同一ノ理由ニ於テ不當ノ論タリ故ニ結局當事者間ニ價格ニ付争アルヤ裁判所ノ認定ニ一任スルノ外ナキナリ〔第六七四條〕組合員ノ持分ハ即チ組合財産ニ對スル不可分の共有權ニ外ナラサルカ故ニ若シ一般共有ノ通則ヲ適用センカ第一ニ組合員ハ何時ニテモ自由ニ持分ヲ處分スルコトヲ得サルヘカラス第二ニ何時ニテモ其共有財産ノ分割ヲ求ムルコトヲ得サルヘカラス而シテ組合ハ獨立ノ人格ヲ有セサル共同團體ニ過キサルカ故ニ組合ノ債權ハ即チ各組合員ノ共同債權ニシテ組合ノ債務ハ又組合員共同ノ債務ナリ從テ組合ノ債務者ハ其債務ト組合員ニ對スル自己ノ債權ト相殺スルコトヲ得サルヘカラス又組員モ組合ノ債權ヲ以テ自己ノ債權者タル組合ノ債務者ニ對シテ相殺ヲ主張スルコトヲ得サルヘカラス然レトモ凡ソ此等ノ結果ハ組合ノ發達ヲ害スルノミナラス其成立ヲ妨クルモノナルカ故ニ法律ハ何レモ明文ヲ以テ或結果ハ之ヲ絶滅シ或結果ニハ制限ヲ加ヘタリ

堪ヘサル可キヲ以テナリ以上ノ重禁錮ニ處セラレタルトキ、
 第四ノ原因ハ他ノ一方カ重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレタルトキ、
 此原因ハ離婚ニ關スル第八百十三條第四號ニ相當ス而シテ縁組ノ當事者ノ一方カ刑法上ノ罪人ト爲ルトキハ他ノ一方ノ爲メ重大ナル不名譽タル可キモノ此ノ如キ場合ニ仍ホ強非テ親子ノ關係ヲ繼續セシムルハ甚タ酷ニ失ス然レトモ如何ナル微罪ヲモ離縁ノ原因ト爲スハ其當ヲ得サルヲ以テ法律ハ重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレタルトキト爲セタリ離婚ノ場合ト離縁ノ場合トニ因リテ刑期并ニ罪質ニ區別ヲ爲シタルハ蓋シ夫婦ノ間ヲ親子ニ比シ一層親密ナラサル可カラサルモノナレハ一方カ犯罪アリテ處刑ヲ受ケタルトキハ他ノ一方ニ於テ之ヲ憐ミ之ヲ助ク可キモノナルヲ以テ夫婦ハ破廉恥最モ甚シキ場合及ヒ其罪狀ノ最モ重キモノニ限り離婚ノ原因アルモノトセリ之ニ反シテ養親ト養子トノ間ハ此ノ如キ關係アル可キモノニ非サルヲ以テナリ
 第五ノ原因ハ養子ニ家名ヲ漬シ又ハ家産ヲ傾クヘキ重大ナル過失アリタルトキ養子ヲ爲スハ多クハ其家ノ家督ヲ相續セシムルニ在リ然ラサルモ永ク其家族

ノ一員ト爲ス可キモノナレハ養子ニシテ其家ノ家名ヲ瀆シ又ハ家産ヲ傾タルカ如キ重大ナル過失アルトキハ是レ養親カ養子ヲ爲シタル目的ニ反スルモノト云フコトヲ得可シ故ニ此ノ如キ場合ハ離婚ノ原因ト爲サ、ル可カラス養子ノ如何ナル行爲カ其家ノ名ヲ瀆スカ又ハ家産ヲ傾タ可キモノナルヤハ家ノ貴富其品位等ニ依リテ異ナルモノニシテ各人同一ナラサルモノナレハ一ニ事實ニ就キテ之ヲ決セサル可カラズ

第六ノ原因 養子カ逃亡シテ三年以上復歸セザルトキ、
 養子ヲ爲スハ家督ヲ相續セシムルカ又ハ家事ヲ助ケシムルニ在リ然ルニ逃亡シテ三年以上モ復歸セザルトキハ養子ヲ爲スノ目的ニ反スルヲ以テ此場合ニ於テ離婚ヲ許スハ當然ノコトニ屬ス

第七ノ原因 養子ノ生死カ三年以上分明ナラザルトキ、
 此原因ハ離婚ニ關スル第八百十三條第九號ニ相當ス而シテ養ニモ屢叙述スルカ如ク養子ハ之ヲシテ家督ヲ相續セシメ然ラザルモ家事ヲ助ケシムルモノナルニ其生死ニシテ三年以上モ分明セザルトキハ養子ヲ爲シタルノ目的ヲ達

スルコト能ハサルヲ以テ此ノ如キ場合ニ於テハ其養子ヲ離婚シ更ニ養子ヲ爲スコトヲ許サ、ル可カラズ

第八ノ原因 他ノ一方カ自己ノ直系尊屬ニ對シテ虐待ヲ爲レ又ハ之ニ重大ナル侮辱ヲ加ヘタルトキ、
 此原因ハ離婚ニ關スル第八百十三條第八號ニ相當スルモノニシテ其理由全ク同一ナレハ再ヒ茲ニ叙述セザルナリ

第九ノ原因 婚養子縁組ノ場合ニ於テ離婚アリタルトキ又ハ養子カ家女ト婚姻ヲ爲シタル場合ニ於テ離婚又ハ婚姻ノ取消アリタルトキ
 此原因ハ離婚ニ關スル第八百十三條第十號ニ相當スルモノニシテ全ク其裏面ヲ規定シタルモノニシテ其趣旨同一ナルヲ以テ今復タ茲ニ説カサルナリ

以上ノ原因アルトキニ限リ養親又ハ養子ヨリ裁判所ニ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得向ホ此外ニ於テハ第八百七十六條ニ定メタル原因アルトキハ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ルモ其他ノ理由ニ因リテハ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得サルナリ
 離婚訴權ノ代理行使

養子カ滿十五年ニ達セサル間ハ其縁組ニ付キ承諾權ヲ有スル者ヨリ縁組ノ訴ヲ提起スルコトヲ得
 第八百四十三條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス第八六七條人事編第一四三條
 此規定ハ縁組ノ承諾ニ關スル第八百四十三條及ヒ協議上ノ縁組ニ關スル第八百六十二條ト其趣旨ヲ同シウスルモノニシテ縁組ノ訴ヲ提起セントスルニ當リ養子カ滿十五年以下ナルトキハ法律上意思能力ナキ者ナレハ何人カ之ニ代リテ縁組ノ訴ヲ提起スルノ道ナカル可カラス是ヲ以テ法律ハ此場合ニ於テ其縁組ニ付キ意思ヲ代表スル者ヨリ之カ訴ヲ提起スルコトヲ得ルモノトセリ即チ養子ノ實家ニ在ル父母若シ父母ノ一方カ知レサルトキ死亡シタルトキ家ヲ去リタルトキ又ハ其意思ヲ表示スルコト能ハサルトキハ他ノ一方父母共ニ知レサルトキ死亡シタルトキ家ヲ去リタルトキ又ハ其意思ヲ表示スルコト能ハサルトキハ其後見人及ヒ親族會ヨリ其幼者ニ代リテ縁組ノ訴ヲ提起スルコトヲ得而シテ父母ノ一方カ繼父母又ハ嫡母ナルトキハ其意思ニ加フルニ親族會ノ

同意ヲ以テスルコトヲ要ス(第八四三條、第八四六條)
 養親又ハ養子カ禁治産者ナルトキハ其心神ヲ回復セル場合ニ在リテハ後見人ノ同意ナクシテ縁組ノ訴ヲ提起スルコトヲ得可シ而シテ其心神喪失中ニ在リテハ人事訴訟手續法第二十五條ニ依リ養親カ禁治産者ナルトキハ其後見人カ親族會ノ同意ヲ得テ縁組ノ訴ヲ提起スルコトヲ得又養子カ禁治産者ナルトキハ實方ノ直系尊屬又ハ實家ノ戸主カ之ヲ提起スルコトヲ得ルコト、セリ
 縁組請求權ノ消滅原因

(一)第八百六十六條第一號乃至第六號(二)當事者一方ノ虐待又ハ侮辱(三)惡意ノ遺棄(三)養親ノ直系尊屬ノ虐待又ハ侮辱(四)重禁錮一年以上ノ處刑(五)家名ヲ濫シ又ハ家産ヲ傾タ可キ養子ノ過失(六)三年以上ノ養子ノ逃亡ノ場合ニ於テ當事者ノ一方カ他ノ一方又ハ其直系尊屬ノ行爲ヲ宥恕シタルトキハ縁組ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス(第八六八條)

此規定ハ離婚ニ關スル第八百十四條第二項ノ規定ニ相當セリ而シテ本條ニ掲クル六個ノ場合ニ於テ當事者ノ一方ヲシテ縁組ノ訴ヲ提起スルコトヲ得セシ

ムル所以ハ主トシテ此等ノ者ヲ保護スルノ趣旨ニ基クモノニシテ敢テ公益上ノ理由ニ基クモノニ非サレハ此特別保護ヲ受クル當事者ニ於テ離婚ノ訴ノ原因タル不良ノ行爲ヲ宥恕スル以上ハ強テ此訴權ヲ存セシムル理由アラサルナリ

(二) 第八百六十六條四號重禁錮一年以上ノ處刑ノ場合ニ於テ當事者ノ一方カ他ノ一方ノ行爲ニ同意シタルトキハ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス

第八百六十六條第四號ニ掲ケタル刑ニ處セラレタル者ハ他ノ一方ニ同一ノ事由アルコトヲ理由トシテ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス(第八六九條人事編第八二條第二項第一四〇條第二項)

此規定ハ離婚ニ關スル第八百十四條第一項及ヒ第八百十五條ニ相當スルモノニシテ其理由モ全ク同一ナレハ今復タ茲ニ叙述セサルナリ

(三) 第八百六十六條第一號乃至第五號及ヒ第八號自己ノ直系尊屬ニ對スル他ノ一方ノ虐待又ハ侮辱ノ事由ニ因ル離婚ノ訴ハ之ヲ提起スル權利ヲ有スル者カ離婚ノ原因タル事實ヲ知りタル時ヨリ一年ヲ經過シタル後ハ之ヲ提起スルコトヲ得ス其事實發生ノ時ヨリ十年ヲ經過シタル後亦同シ(第八七〇條)

此規定ハ離婚ニ關スル第八百十六條ニ相當スルモノニシテ其規定ノ性質モ全ク同一ナレハ茲ニ復説セス

(四) 第八百六十六條第六號ノ事由ニ因ル離婚ノ訴ハ養親カ養子ノ復歸シタルコトヲ知りタル時ヨリ一年ヲ經過シタル後ハ之ヲ提起スルコトヲ得ス其復歸ノ時ヨリ十年ヲ經過シタル後亦同シ(第七七一條)

第八百六十六條第六號ハ養子カ逃亡シテ三年以上復歸セサル場合ニシテ養子カ復歸シタルトキハ離婚ノ原因消滅シタルモノ、如シト雖モ三年以上モ逃亡ヲ爲スカ如キ養子ハ養親ニ於テ之ヲ信任スルコト能ハサルヲ以テ復歸シタル後ト雖モ仍ホ其離婚ヲ請求スルコトヲ得ルモノトセリ然レトモ養子ノ復歸シタルコトヲ了知シタルニ拘ハラズ長キ間離婚ノ請求ヲ爲サスシテ後年ニ至リ突然離婚ノ請求ヲ爲スコトアラハ是レ多クハ口實ヲ養子ノ逃亡ニ假リテ實際他ノ理由ニ因リテ離婚ヲ爲サント欲スル者ナリ故ニ法律ハ養親ニ養子ノ復歸後長年月ヲ看過スルコトヲ許サス養親カ養子ノ復歸シタルコトヲ知りタル時ヨリ一年ヲ經過シタル後ハ復タ離婚ノ請求ヲ爲スコトヲ許ササルモノトセリ

若シ又養子カ復歸シタル事實ヲ知ラサル場合ニ於テモ其事由發生シテヨリ既ニ十年モ經過シタルトキハ養子ノ非行ニ對スル感情ハ既ニ薄ク眞ニ此原因ノ爲メニ離婚ヲ請求セント欲スル者ハ稀ナル可ク而シテ養子ニ十年前逃亡シタルノ過失アリトスルモ今仍ホ養子ニ同様ノ非行アル可キ者ト看做シ難ク又養子ニ於テハ養親カ養子ノ復歸シタルヲ知レルコトノ證據ヲ舉タルコト能ハサルナリ故ニ法律ハ養子復歸ノ時ヨリ十年ヲ經過シタルトキハ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ許サマルモノトセリ

(五) 第八百六十六條第七號三年以上養子ノ生死カ分明セサルトキノ事由ニ因ル離婚ノ訴ハ養子ノ生死カ分明ト爲リタル後ハ之ヲ提起スルコトヲ得ス(第八七二條)

此規定ハ離婚ニ關スル第八百七十七條ト全ク同一ナルヲ以テ茲ニ復説セザルナリ

(六) 第八百六十六條第九號ノ事由(婚養子縁組ノ場合ニ於テ離婚アリタルトキ又ハ養子カ家女ト婚姻ヲ爲シタル場合ニ於テ離婚若クハ婚姻ノ取消アリタルト

キ)ニ因ル離婚ノ訴ハ當事者カ離婚又ハ婚姻ノ取消アリタルコトヲ知リタル後六ヶ月ヲ經過シ又ハ離婚請求ノ權利ヲ拋棄シタルトキハ之ヲ提起スルコトヲ得ス(第八七三條第二項人事編第一四八條)

此規定ハ離婚ニ關スル第八百十八條第二項ト同趣旨ナリ唯離婚ノ請求ノ期間ハ三個月ナルニ茲ニ規定スル離婚ノ請求期間ヲ六個月ト爲シタル差異アルノハ是レ疑ニ養子縁組ノ取消ニ關スル第八百五十三條、第八百五十五條、第八百五十八條第二項ト同一ノ理由ニ基キタルモノナレハ茲ニ復説セザルナリ

第八百六十六條第九號ノ場合ニ於ケル離婚訴權行使ノ方法

第八百六十六條第九號ノ場合ニ於テ離婚又ハ婚姻取消ノ請求アリタルトキハ之ニ附帶シテ離婚ノ請求ヲ爲スコトヲ得(第八七三條第一項人事編第一四八條)此規定ハ右第八百十八條第一項ト同趣旨ニシテ殆ント其裏面ヲ規定シタルニ過キサレハ茲ニ復其理由ヲ説述セザルナリ

以上叙述シタル所ハ裁判上ノ離婚ニ關スル規定ナルカ協議上ノ離婚及ヒ裁判上ノ離婚ニ通スル特別規定アリ之ヲ左ニ叙述セン

(一) 養子戸主ノ離縁ヲ養子カ戸主ト爲リタル後ハ離縁ヲ爲スコトヲ得ス但隠居ヲ爲シタル後ハ此限ニ在ラス(第八七四條人事編第一四五條)

戸主タル養子ノ離縁ヲ許ストキハ一家ノ戸主ヲ廢スルニ至ル夫レ家族制度ニ於ケル一家ノ戸主權ハ一家ヲ管理スル絕對ノ權利ナレバ既ニ戸主ト爲リタル上ハ戸主ニ何等ノ事由アルモ其意思ニ反シテ他ヨリ之ヲ排斥スルコトヲ許サス隨テ養子カ戸主ト爲リタル後モ養子ヲ離縁シ戸主權ヲ排斥セシムルコトヲ得ス然レトモ養子カ隠居ヲ爲ストキハ再ヒ家族ト爲ルカ故ニ之ヲ離縁スルモ毫モ戸主權ニ影響ヲ及ボサハルヲ以テ隠居ヲ爲シタル養子ヲ離縁スルコトハ恰モ他ノ家族タル養子ヲ離縁スルコトヲ得ルト同シタ許サハル可カラス唯タ養子カ隠居ヲ爲スニハ法定ノ條件第七五二條乃至第七五〇五條ヲ具備セサル可カラス而シテ戸主カ隠居ヲ爲スハ縱令法定ノ條件ヲ具備スト雖モ戸主獨リ任意ニ之ヲ爲スニ止マリ如何ナル事由アルトモ他ヨリ戸主ニ對シ訴ヲ以テ隠居ヲ爲サシムルコトヲ得ヌ故ニ戸主タル養子ニ離縁ノ原由生シタルトキハ法定ノ條件ノ具備シタル場合ニ於テ養子カ任意ニ隠居ヲ爲シタル後ニ非サレハ

離縁ヲ爲スコトヲ得サルナリ

此規定ハ一見スルトキハ從來ノ慣行ニ反スルカ如シト雖モ其實然ラサルナリ從來養子カ戸主タルトキハ之ヲ離縁セントスルニハ戸主ノ僅離縁スルコトヲ許サス一旦戸主ヲ廢シテ養子ヲ離縁スルヲ例トセリ故ニ戸主タル養子ヲ離縁スル訴訟ニ廢戸主離縁請求ト題スルモノ多カリシナリ

(二) 離縁ノ効力 養子ハ離縁ニ因リ其實家ニ於テ有セシ身分ヲ回復ス但第三者カ既ニ取得シタル權利ヲ害スルコトヲ得ス(第八七五條)

養子カ離縁シタルトキハ第七百三十九條ノ規定ニ從ヒ實家ニ復籍スレトモ爾後實家ニ於テ如何ナル關係ヲ有スルカ曾テ養子タラサル以前實家ニ於テ有セシ身分ヲ回復スルカ將タ復籍後新ニ之ヲ取得スルモノナルカ養子ハ縁組ニ因リ實家ニ於ケル親族關係ヲ失ヒタルモノニ非ス之カ爲メニ養家ニ於ケル親族關係ヲ増シタルモ實家ニ於ケル關係ハ依然タルナリ例ヘハ實家ノ父母兄弟姉妹ハ同シク父母兄弟姉妹タリ又實家ニ於テ嫡出子又ハ庶子タリシナランニハ養子縁組ノ後モ同シク實家ノ父母嫡出子又ハ庶子タルナリ故ニ離縁ノ後養

子カ其實家ニ於テ有セシ身分ヲ回復スルハ右ノ親族關係ヲ指スニ非スシテ養子カ實家ニ於テ其身分ニ付キ有セシ權利義務等ヲ回復スルコトヲ云フニ外ナラサルナリ例ヘキ養子ハ實家ニ復歸シテ相續權ヲ有シ親權及ヒ戶主權ニ服スルカ如キ是レナリ若シ養子カ離縁ニ因リ實家ニ復籍シタルトキハ以前有セシ權利ヲ回復スルコトナクシテ復籍ノ時ヨリ新ニ其家ニ入りタル者ト同一ノ權利ヲ有スルモノトスルトキハ次男ニシテ實家ニ兄長男ト弟(三男)トアリタル場合ニ於テ他家ノ養子ト爲リ兄長男死亡シタル後離縁シテ實家ニ復籍シタリトセンカ此場合ニ於テハ三男カ父ノ相續權ヲ有ス可シ又次男ニシテ實家ニ兄長男ト妹トアル場合ニ於テ他家ノ養子ト爲リ實家ニ於テハ兄死亡シタルヲ以テ妹ニ他ヨリ婿養子ヲ爲シタル後ニ至リ離縁シテ實家ニ復籍シタリトセンカ此場合ニ於テハ婿養子相續權ヲ有ス可シ然レトモ養子タリシ者ハ本條ノ規定ニ依リ曾テ實家ニ於テ有セシ身分ヲ回復スルカ故ニ第九百七十條第一項第五號ノ規定ニ從ヒ當然實家ノ相續權ヲ有ス可シ

トアルニ拘ハラヌ離縁シタル者カ其權利ヲ回復スルコトヲ得ルモノトスルトキハ第三者ニ意外ノ損失ヲ被ムラシムルコトアル可キヲ以テ法律ハ但書ヲ設ケ第三者ノ權利ヲ保護シ實際上ノ侵害ヲ豫防セリ故ニ前ニ擧ケタル例ニ於テ養子離縁ノ際弟(三男)又ハ妹婿カ既ニ父ノ相續ヲ爲シタル後ナルニ於テハ養子タリシ者ハ相續人ヲ排斥シテ自ラ相續ヲ爲スコトヲ得サルナリ

(三)夫婦カ養子ト爲リ又ハ養子カ養親ノ他ノ養子ト婚姻ヲ爲シタル場合ニ於テ妻カ離縁ニ因リテ養家ヲ去ルヘキトキハ夫ハ其選擇ニ從ヒ離縁又ハ離婚ヲ爲スコトヲ要ス(第八七六條)

夫婦カ共ニ養子ト爲リ又ハ養子カ養親ノ他ノ養子ト婚姻シタル場合ニ於テ其一方ノミヲ離縁スルコトヲ得可キコトハ既ニ叙述セリ然レトモ夫婦ノ一方ノミ他ノ養子ト爲リテ居リナカラ離縁シタル者ト依然夫婦ノ關係ヲ存スルコトハ許ス可キニアラサルナリ何トナレハ本法ノ規定第七四五條第七六四條第二項第七八八條ニ依リ夫婦家ヲ異ニスルコトヲ得サレハナリ若シ夫婦ノ中夫ノミ離縁ト爲リタル場合ニ於テ妻ハ當然夫ニ隨ヒテ其家ニ入り之ト同時ニ離縁

ト同シク其養家ニ對スル親族關係ヲ脱スルモノナレハ此場合ニ於テハ何等
 支障ヲ生セサルナリ之ニ反シテ妻ノミ離縁セラレテ養家ヲ去リタルトキ夫ハ
 固ヨリ當然妻ノ家ニ入ルモノニ非ス是ヲ以テ夫ハ此場合ニ於テハ養家ニ對ス
 ル縁組關係カ若クハ妻ニ對スル婚姻關係カ孰レカ其一ヲ絶タサル可カラス然
 レトモ法律上此ノ如キ場合ニ夫カ絶ツ可キモノヲ豫メ指示シテ夫ノ自由ヲ拘
 束スルコトハ人情ニ反シ其當ヲ得サルヲ以テ本法ハ夫ヲシテ縁組關係ヲ絶ツ
 可キカ將タ婚姻關係ヲ絶ツ可キカニ付キ夫ニ選擇權ヲ與ヘ或ハ協議ニ依リ或
 ハ裁判所ニ請求シテ離縁又ハ離婚ノ孰レカラ爲スコトヲ要スルモノトセリ

第五章 親權

親權ノ性質

親權トハ法律カ子ノ身分及ヒ財産ニ關シテ其家ニ在ル父又ハ母ニ對シテ付與
 シタル權利及ヒ義務ノ集合ナリ此定義ニ從フトキハ親權ヲ有スル者ハ子ト家
 フ同シウスル父母ニ限ルカ故ニ縱令父母ト雖モ子ト家ヲ同シウセサル者ハ此
 權利ヲ有セス而シテ祖父母其他ノ尊屬親ハ勿論戶主ノ如キモ父母ニ非サル限

リハ親權ヲ有セス又家ニ在ル父母ト雖モ繼父母又ハ嫡母ナルトキハ親權ヲ有
 スト雖モ其權利ハ實父母養父母ノ如ク完全ナラスシテ制限セラル、所アリ(第
 八七八條)而シテ子ニ付テ云ヘハ親權ニ服スル者ハ嫡出子タルト庶子タルト私
 生子タルトヲ問ハサルナリ
 親權ニ服スル子ノ年齢ハ之ヲ成年ニ達スル迄ト限ラサルカ故ニ其年齢ニ付テ
 ハ制限ナシト雖モ法律ノ規定上成年者ニ對スル親權ノ効力ハ極メテ薄弱ナリ
 (獨立ノ生計ヲ立ツル成年者ハ親權ニ服セス(第八七七條)然レトモ獨立ノ生計ヲ
 立ツル成年ノ子ト雖モ婚姻(第七七二條)養子縁組(第八四四條)協議上ノ離縁(第
 六三條)ヲ爲スニ付テハ其家ニ在ル父母ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス)
 法律カ親權ヲ設ケタル趣旨ハ親權ヲ有スル者ノ直接ノ利益ノ爲メニ非スシテ
 親權ニ從フ者ノ直接ノ利益ノ爲メニシタルモノナリ元來親ハ其子ヲ養育シ教
 育スルノ義務アリ而シテ其教育養育ノ義務ヲ盡スニハ能ク其子ヲ養育シ教育
 シ得ルノ状態ニ在ラシメサル可カラス蓋シ親ヲシテ能ク其子ヲ養育シ教育シ
 得ルノ状態ニ在ラシメント欲セハ先ツ親ニ之ヲ制御スルノ權ヲ與ヘサル可カ

ラス換言スレハ監護ノ權ヲ與ヘテ父母ノ住家ヲ去リタル子ヲ歸家セシムルノ權力ヲ得セシメ又懲戒ノ權ヲ與ヘテ重大ナル不行跡ナル子ヲ感化場又ハ懲戒場ニ入ルハノ權力ヲ得セシムルコトヲ要スルカ如キ是ナリ又子ハ自ラ其利益ヲ保護スルノ能力ナキカ故ニ父又ハ母ハ之ニ代リテ其利益ヲ保護ス而シテ親權ハ此點ニ付テハ子ノ利益ヲ保護スルヲ以テ其目的ト爲スカ故ニ親權ヲ行フ者カ爲ス行爲ノ範圍ハ子ノ利益ヲ害セサルヲ限度トシ其不利益タル可キ行爲ハ決シテ之ヲ許サハルナリ

親權ノ設定ノ目的ハ右ニ説クカ如ク主トシテ子ノ直接ノ利益ノ爲メナレトモ亦タ國家及ヒ父母モ亦之カ爲メニ間接ノ利益ヲ有ス其國家ノ利益トシテハ親權ノ設定ナキトキハ教育ナキ不良ノ徒ヲ増シ國家ノ自存及ヒ發達ヲ妨ク可ク財產管理ノ能力ナキ者ノ財產ヲ抛擲スルハ國家經濟ノ利益ヲ害スルナリ又親權ヲ行フ者ノ利益トハ子カ完全ニ發達スルト否トハ親ノ利益ニ重大ノ影響ヲ及ホス言フヲ俟タサルナリ

親權ハ子ノ保護ノ爲メニ設ケラレ後見ノ制度モ亦然ルモノニシテ未成年者ノ

シムルハ當然ノ事理ナルヲミナラス第三百三十三條ニ依リ動産ノ上ニ存スル先取特權ハ債務者カ其動産ヲ第三取得者ニ引渡シタル後ハ之ヲ行フコトヲ得サルヲ以テ此規定ハ此等ノ場合ニ於ケル先取特權ノ効力ヲ確實ナラシムルモノト謂フヘキナリ

(2)先取特權ノ負擔アル物ヲ質貸シタルトキ先取特權ノ目的物ヲ質貸シタル場合ニ於テハ其借貸即チ小作料家賃或ハ損料等ノ如キハ共ニ皆物ノ使用ノ對價ニシテ其物ノ價値ノ一部ヲ代表スルモノト謂フヘシ是レ法律カ第一ノ場合ト同シク其使用ノ對價タル金錢其他ノ物ヲ受取ル債權ノ上ニ先取特權ヲ行フコトヲ得セシメタル所以ナリ

(3)先取特權ノ負擔アル物カ滅失シ又ハ毀損シタルニ因リ第三者之カ爲メ債務者ニ賠償ヲ負擔シタルトキ例ヘハ先取特權ノ目的物カ第三者ノ不法行爲ニ因リ全部滅失シ又ハ一部ノ毀損ヲ生シタルトキハ債務者ハ損害賠償ノ請求權ヲ有ス而シテ此權利ハ其物ノ所有權ノ代ハリニ發生シタルモノナリ或ハ先取特權ノ目的物ヲ保險ニ付シタル場合ニ於テ其物カ滅失シタルトキハ債務者ハ

保險者ニ對シテ保險金ヲ請求スルヲ得ヘシ而シテ此保險金ハ滅失シタル物ノ代價ヲ表示スルモノナルヲ以テ此等ノ場合ニ於テ其請求權ノ上ニ先取特權ヲ行フコトヲ得セシメタリ

(4)先取特權ノ負擔アル物ノ上ニ債務者カ物權ヲ設定シ其對價ヲ得ヘキトキ例ヘハ債務者カ先取特權ノ目的物ノ上ニ永小作權ヲ設定シ以テ小作料ヲ得ヘキトキ或ハ地上權ヲ設定シ以テ地代ヲ得ヘキトキ或ハ又地役權ヲ設定シ以テ賃金ヲ得ヘキ場合ノ如シ此等ノ場合ハ第二ノ場合タル先取特權ノ目的物ヲ貸貸シタル場合ト異ナルコトナシ是レ法律カ其對價ヲ請求スル權利ノ上ニ先取特權ヲ行フコトヲ得セシメタル所以ナリ

前述セシ各場合ニ於テ其目的物ニ代ハルヘキ債權ノ上ニ先取特權ヲ行使セント欲セハ先取特權者ハ金錢其他ノ物ノ拂渡又ハ引渡前ニ差押ノ手續ヲ爲サ、ルヘカラス是レ至當ノ制限ニシテ然ラサレハ他ノ債權者ハ爲メニ損害ヲ被ルノ恐レアレハナリ

是レ第三百五條ノ規定スル所ニシテ同條ハ第二百九十六條ノ規

定ヲ準用セリ而シテ不可分權ノ何物タルハ前章ニ於テ詳述セシヲ以テ再ヒ茲ニ贅セス

第二節 先取特權ノ種類

先取特權ハ之ヲ分チテ三種ト爲ス第一種ハ一般ノ先取特權ト稱スルモノニシテ債務者ノ總財産ノ上ニ存スルモノナリ即チ動產不動產及ヒ其他ノ財産權ノ上ニ存ス第二種ハ動產ノ先取特權ト稱スルモノニシテ債務者ノ特定動產ノ上ニ存ス第三種ハ不動產ノ先取特權ト稱スルモノニシテ債務者ノ特定不動產ノ上ニ存ス以下款ヲ分チテ順次之ヲ講述スヘシ

第一款 一般ノ先取特權

一般ノ先取特權ハ債務者ノ總財産即チ動產不動產及ヒ其他ノ財産權ノ上ニ存ス故ニ一般ノ先取特權ヲ附着セシメラレタル債權ハ其効力極メテ強力ニシテ其擔保最モ確實ナルモノト謂ハサルヘカラス隨テ如何ナル原因ヨリ生シタル債權ニ此先取特權ヲ附着セシムヘキヤハ重要ノ問題ニシテ其債權ノ種類ハ必要ノ範圍ニ制限セスンハ他ノ債權者ハ爲メニ損害ヲ被ルコト渺カラサルヘシ

是レ第三百六條カ一般ノ先取特權ニ依リテ擔保セラルヘキ債權ノ原因ヲ四種ニ限定セシ所以ニシテ此等ノ原因ヨリ發生セシ債權ヲ有スル者ニ非サレハ一般ノ先取特權ヲ有スルコトナシ

第一 共益費用ノ先取特權

此先取特權ハ第三百七條ノ規定スル所ニシテ各債權者ノ共同利益ノ爲メニ爲シタル債務者ノ財産ノ保存清算又ハ配當ニ關スル費用ニ付キ存在スルモノナリ例ヘハ債務者ノ財産ニ封印ヲ施シ之カ目録ヲ調製シ債權債務ノ清算ヲ爲シ其財産ヲ債權者ニ配當スルカ爲メニ費消セシ費用ニ付キテハ債務者ノ總財産中ヨリ先取スル權利ヲ有スルカ如キ是ナリ而シテ此等ノ費用ハ通常各債權者ノ爲メニ必要ナルモノニシテ此等ノ手續ヲ履行セサレハ各債權者ハ辨濟ヲ受クルコトヲ得サルモノナリ隨テ此費用ハ債權者カ辨濟ヲ受クルニ至リタル原因ヲ成セルモノト謂フコトヲ得ヘシ是レ一般ノ先取特權ヲ以テ此債權ヲ保護セシ所以ナリ然リト雖モ右ノ費用ノ爲メ利益ヲ受ケサル債權者ニ對シテモ尙ホ此先取債權ヲ行フコトヲ得ルモノトセハ其債權者ノ迷惑計ルヘカラス如

何トナレハ利益ヲ受ケサル債權者ニ取リテハ此費用ハ辨濟ヲ受クルニ至リタル原因ヲ成スモノニ非サレハナリ是レ本條第二項ニ於テ前項ノ費用中總債權者ニ有益ナラザリシモノニ付テハ先取特權ハ其費用ノ爲メ利益ヲ受ケタル債權者ニ對シテノミ存在スト規定セシ所以ナリ

第二 葬式費用ノ先取特權

此先取特權ハ次ニ講述スヘキ雇人給料ノ先取特權及ヒ日用品供給ノ先取特權ト同シク共ニ公益上ノ理由ニ基クモノナリ隨テ公平ヲ保持スルカ爲メニ規定セシ前述ノ共益費用ノ先取特權トハ其理由ヲ異ニスルモノナルコトヲ注意スヘシ
葬式費用ノ先取特權カ公益上ノ理由ニ基クモノナルコトヲ解説スレハ之ヲ二個ノ方面ヨリ觀察説明スルコトヲ得ヘシ即チ一ハ道德上ノ理由ニシテ他ハ衛生上ノ理由はナリ抑モ冠婚葬祭ハ古來人生ノ大禮トスル所ニシテ殊ニ葬式ノ如キ死者ニ厚クスル所以ニシテ我國ノ社會道德上最モ重要視スル一事項ナリ然ルニ死者ノ葬式ニシテ之ヲ營ムコト能ハサルカ如キコトアラシカ公益上

由々シキ大事ナリト謂ハサルヘカラス又一面ニ於テ死屍ヲ處置スルコトヲ得サルカ如キハ公衆ノ衛生上漫然看過スヘカラサル事項ニ屬ス是レ第三百八條ニ於テ葬式費用ノ債權者ニ先取特權ヲ付與シ以テ此悲惨ニシテ且危險ナル事態ナカラシメンコトヲ圖リタル所以ナリ然リト雖モ先取特權ヲ以テ保護セラル、葬式費用ハ純然タル葬式費用ニシテ葬式ニ連續シタル費用ノ如キハ之ヲ包含セサルナリ例ヘハ葬式後ノ法會祭典ニ關スル費用ノ如キ或ハ石碑調成ノ費用ノ如キハ先取特權ヲ以テ保護セラルヘキニ非サルナリ又身分不相應ニ華美莊重ナル葬儀ヲ營ミタル費用ノ如キ之ニ先取特權ヲ附隨セシムルハ法律ノ精神ニアラサルナリ然リト雖モ此先取特權ハ單ニ衛生上ノ理由ニノミ基キタルモノニ非スシテ道德上ノ理由モアレハ債權者ノ身分ニ相應シタル葬儀ヲ營ミタル費用ノ債權者ハ先取特權ヲ以テ保護セラルヘシ(第三〇八條第一項)債權者ノ親族又ハ家族ノ死亡セシ場合、年少者婦女女子ノ死亡セシ場合ニハ父兄ニ於テ葬儀ヲ營ムヘキモノニシテ又家族ハ財産ヲ有セサルコト普通ナリ然ルニ戸主貧困ニシテ葬儀ヲ營ム能ハサル如キコトアリテハ公益上有害ナルコ

ト決シテ前述セシ場合ニ讓ラサルナリ是レ第三百八條第二項ニ於テ前項ノ先取特權ハ債權者カ其扶養スヘキ親族又ハ家族ノ身分ニ應シテ爲シタル葬式ノ費用ニ付テモ亦存在スト規定セシ所以ナリ而シテ其扶養スヘキ親族又ハ家族ハ親族篇ノ規定ヲ一讀スヘシ又此場合ニ於テモ自分相應ノ條件ヲ必要トス而シテ此場合ニ於テハ債權者ノ身分相應ニ非スシテ死者ノ自分相應ナルコトヲ注意スヘシ

第三 雇人給料ノ先取特權

雇人給料ノ先取特權ハ第三百九條ノ規定スル所ナリ是レ亦公益上ノ理由ニ基クモノニシテ直接ニ説明スレハ(第二)通常雇人ノ如キハ貧困者ニシテ僅少ノ給料ヲ得テ僅ニ其生活ヲ維持スル者ナリ然ルニ一朝主人ノ破産若クハ分散スルニ遭ヒ給料ノ不拂ヲ來スカ如キコトアリテハ或ハ餓餓ニ迫マルコトナキヲ保セシ是レ社會經濟上極メテ有害ナリ(第二)從來雇人ヲ使用シ來リシ者カ一朝雇人ニ見捨テラルルニ至リテハ其不便ヲ感スルハ勿論其人ニシテ疾病ニ罹リ居ルカ如キ場合ニ於テハ或ハ生命ニ關係ヲ及ホスコトナキヲ保セシ是レ道德上

極メテ不可ナリ。此先取特權ハ一切ノ雇人皆之ヲ有スト雖モ其期間ト金額ニ關スルニ制限アリ即チ最後ノ六ヶ月ノ給料ナルコト及ヒ其金額ハ五十圓ヲ超過セサルコト是ナリ。

第四 日用品供給ノ先取特權

日用品供給ノ先取特權ハ第三百十條ノ規定スル所ナリ此先取特權ヲ與フル理由モ亦公益上ノ理由ニ基クモノナリ即チ債務者如何ニ貧困ナルモ日用品ヲ購求スルコトヲ得サルカ如キコトナカラシメンカ爲メニ日用品供給者ニ先取特權ヲ與ヘ以テ此憂ナカラシメタリ勿論無制限ニ此先取特權ヲ行フコトヲ得セシムルトキハ他ノ債權者ニ不慮ノ損失ヲ及ホシ不公平ノ結果ヲ來スヲ以テ左ノ制限ニ從フコトヲ要ス。

第一 人ニ關スル制限 債務者又ハ其扶養スルキ同居ノ親族並ニ家族及ヒ其奴婢ニ給與シタルモノナルコトヲ要ス。

第二 種類及ヒ分量ニ關スル制限 法文ニハ生活ニ必要ナル飲食品及ヒ薪炭油

ノトセリ我舊民法ハ佛國法其他佛法系ノ法律ヲ參酌シタルモノナルカ故ニ其未成年ノ制度ハ概チ佛國法ト異ルコトナシ

又獨逸法系ノ法律ニ於テハ成年ノ宣告ナル制度ヲ認メ未成年ニ達セサル者ニ對シ成年ニ達シタリトノ宣告ヲ爲ス場合アリ是レ恰モ羅馬ノ「ゲエニヤ、エタチス」ト其精神ヲ同シウシ且不動産ノ讓渡ノミニ付テ例外ヲ認メタル點ニ於テモ全ク同一ナリトス唯其佛國法ト異ル所ハ「エマンパシヨン」ハ一種見習ノ性質ヲ有シ即チ未成年者カ成年ニ達スルトキハ僅々一日ノ差ニ因リテ從來殆ト一切ノ法律行爲ヲ爲スコトヲ得サリシ者カ總テノ法律行爲ヲ有効ニ爲スコトヲ得ルニ至リ極メテ危險ナルカ故ニ成年ニ達スルノ前即チ未成年ノ時ニ於テ自治産ナル時期ヲ認メ漸次法律行爲ニ價レシメントスルニ在ルモ成年ノ宣告ハ全ク此目的ニ合ハサルノ點ニ在リ而シテ佛國ノ制度ハ理論上最モ完全ナルカ如キモ其實際ニ於テハ半ハ無能力ニシテ半ハ有能力ナル者ヲ見ルニ至リ頗ル煩雜ヲ極メ其不便謂フヘカラス然レトモ二十年又ハ二十一年ト云フ如ク一定ノ年齢ヲ限リテ能力無能力ヲ別ツノ方法モ唯一般ノ標準タルニ過キスシテ其實

際ニ適セザルヤ勿論ナリ殊ニ婚姻ノ如キハ未成年者ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得ルハ各國其法制ヲ一ニスル所ニシテ日本ニ於テハ男子ハ十七歳女子ハ十五歳ニ達スレハ可ナリ而シテ此場合ニ於テモ夫ハ妻ニ對シ夫權ヲ有シ妻ノ法律行爲ヲ許否スルコトヲ得ヘシ然ルニ一方ニ於テハ夫ハ尙未成年者ナルカ故ニ己レ自ラ法律行爲ヲ爲スコトヲ得ス是レ實ニ奇怪ノ至ナラスヤ加之婚姻ノ結果子ヲ生スルトキハ未成年者タル父ハ其子ニ對シテ親權ヲ行フヘキニ拘ハラス自ラ親權又ハ後見ニ服セサルヘカラス殊ニ財産上ニ付テハ夫又ハ親トシテ妻又ハ子ノ財産ヲ管理スヘキ者タルニ拘ハラス己レ自ラ其財産ヲ管理スルコト能ハス事理ノ轉倒モ此ニ至リテ極マレリト謂フヘシ(新民法ニ於テハ此缺點ヲ補フ爲メ一八條ヲ以テ未成年ノ夫カ妻ニ許可ヲ與フルニハ其法定代理人ノ同意ヲ得ヘキモノトシ八八五條九二一條九三四條二項ヲ以テ親權者又ハ後見人カ未成年者ニ代リテ親權ヲ行ヒ又ハ配偶者ノ財産ヲ管理スヘキモノトセリ)是ヲ以テ歐洲多數國ノ法律ニ於テハ婚姻ヲ爲シタル後ハ親權又ハ後見ヲ免脱スヘキモノトセリ而シテ我舊民法ニ於テハ佛國法ト同シク此場合ヲ以テ自治

産ト爲シ保佐ノ下ニ在ラシメタリ
上來論述セル獨逸主義ト佛國主義トハ孰レヲ以テ是ナリトスヘキカ理論上ニ於テハ佛國主義ノ優レルコト謂フヲ待タスト雖モ實際上ニ於テハ甚タ煩雜ヲ來シ其不便少カラサルカ故ニ此ノ如キ規定ヲ利用スル者多カラサルヘシ佛國ニ於テモ特ニ自治産ヲ許可スル者ハ稀ナリト云ヘリ隨テ理論ニ於テハ稍ヤ劣ル所アリト雖モ獨逸主義ノ簡且便ナルニ如カサルヘシ然リト雖モ縱令此制度ヲ認ムルモ商工業ヲ爲スコトヲ許サレタル未成年者ニ對シテハ其營業ニ關シ總テノ財産ヲ自由ニ處分スルコトヲ許サ、ルヘカラス而シテ其所謂成年ノ宣告ナルモノハ極メテ簡單ナル事項ニシテ全然其能力ヲ認ムルカ將タ不動産ノ讓渡ノミニ付キテ制限ヲ設クヘキカノ二者ニ歸着スヘキカ故ニ其能力ヲ認ムルノ年齢ニ關シテモ主トシテ醫學上ノ認定ヲ待ツヘク單純ナル法律問題トシテ之ヲ決スルコトヲ得サルナリ
自治産ノ制度ヲ採用スルトキハ主トシテ保佐人ノ選定未成年者ノ能力自治産ノ取消等ヲ規定セサルヘカラス

保佐人ニ關スル舊民法ノ規定ニ依レハ當然保佐人遺言保佐人法定保佐人選定人保佐人ノ四種アリ是レ法文上此ノ如キ名稱ヲ付スルコトナシト雖モ其規定ヲ玩味スルトキハ自ラ右ノ區別ヲ生セサルコトヲ得ス而シテ當然保佐人トハ父母又ハ夫ノ保佐人タル場合ヲ謂ヒ即チ妻カ未成年者ナルトキハ夫ハ之カ保佐人ト爲リ子カ未成年者ナルトキハ其父又ハ母之カ保佐人タルモノトス此規定ハ極メテ至當ナルコト言フヲ俟タスト雖モ若シ父母及ヒ夫ノ併存スル場合ニ於テ何レヲ以テ保佐人トスヘキカニ付キ疑ナキ能ハス蓋シ此ノ如キハ實際上太々稀ナル事實ニシテ通常妻ハ夫ノ家ニ嫁クカ故ニ夫ト父母ノ併存スルコトナシト雖モ入夫又ハ婿養子ノ場合ニ於テハ夫及ヒ父母ノ併存スルヲ常トス惟フニ舊民法ハ此ノ如キ場合ニ於テハ夫ヲ以テ保佐人ト爲スノ精神ナルヘシ亦道理上然ラサルヲ得スト雖モ若シ夫ニシテ未成年者ナルトキハ自ラ妻ノ保佐人ト爲ルコトヲ得サルヲ以テ已ムヲ得ス父母ヲ以テ保佐人ト爲サ、ルコトヲ得サルナリ次ニ遺言保佐人トハ保佐人タル父又ハ母カ死去スルニ際リ遺言ヲ以テ指定シタル保佐人ヲ謂フ是レ父母カ死ニ臨ミ其子ノ後ヲ思フカ如ク人情ノ深且

切ナルモノナキヲ以テ法律ハ其保佐人ノ選定ヲ父母ノ遺言ニ一任シタルモノニシテ定ニ至當ナル規定ナリトス次ニ法定保佐人トハ父母ノ選定シタル遺言保佐人ナキ場合ニ於テ法律自ラ之ヲ指定スルモノニシテ舊民法ハ此場合ニ關シ成年者タル戸主若シ戸主未成年アルトキハ其家ノ祖父ヲ保佐人ト爲スヘキモノトセリ然レトモ父母ニアラサル戸主又ハ老年ナル祖父ヲ以テ保佐人ト爲スカ如キハ其當否ニ付キ疑ナキ能ハス(新民法ハ準禁治産者ノ保佐人ニ付キ祖父ヲ以テ法定保佐人トセス)終ニ選定保佐人トハ法定保佐人ナキ場合ニ親族會ニ於テ選定シタル保佐人ヲ謂フ
自治產未成年者ノ能力ニ關シテハ各國ノ法制概キ同一ニシテ未自治產未成年者ハ法定代理人ノ同意ヲ得テ總テノ法律行為ヲ爲スコトヲ得ヘント得モ法律ハ專ラ法定代理人ニ於テ代リテ一切ノ法律行為ヲ爲スコトヲ望メルニ反シ自治產未成年者ハ原則トシテハ如何ナル行為ニ付テハ其獨斷ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘク殊ニ管理行為ニ屬スル大多數ノ行為ニ付テハ其獨斷ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レトモ自治產未成年者ハ素ト成年者ニテラサルヲ以テ未タ完全ナル能力

ヲ有スルコトヲ得ス今其成年者ト異ル點ヲ擧ケレハ第一、成年者ノ如ク處分
 行爲ヲ爲スコトヲ得ス第二、管理行爲ト雖モ重大ナル行爲ニ付テハ保佐人ノ
 同意ヲ經ルコトヲ要ス(舊民法ニハ)立會アルコトヲ要ストアリシモ其意寧ロ同
 意ヲ指セルモノナリ等ノ如シ尙舊民法ニ於テハ保佐人ハ常ニ獨斷ニテ同意ス
 ルコトヲ得タリト雖モ歐洲各國ノ法律ハ概テ重大ナル法律行爲ニ付テハ或ハ
 親族會ノ許可ヲ必要トシ或ハ裁判所ノ許可ヲ必要トセリ予ハ寧ロ歐洲諸國ノ
 規定ヲ以テ至當ナリト信ス(新民法ハ準禁治産ニ付キ此等ノ制限ヲ設ケス)
 自治産未成年者ハ全ク贈與ヲ爲ス能力ヲ有セス但シ遺贈ハ獨斷ニテ之ヲ爲ス
 コトヲ得是レ固ヨリ當然ノ規定ナリト雖モ本邦ノ慣習上果シテ實際ニ適スル
 ヤ否ヤ聊カ疑ナキ能ハス蓋シ日本ハ家族制ノ國ナルカ故ニ未成年者タル戸主
 ハ財産ヲ有スルモ他ノ家族ハ特別ノ財産ヲ有セサルヲ常トス隨テ家族ナル父
 母ノ別居スルカ如キ場合ニ於テ未成年者タル戸主ヲシテ贈與ヲ爲スコトヲ得
 セシムルノ必要アリ又日本ニ於テハ未成年者タル父カ嬰兒ヲ養子トシテ他ニ
 遺スコト多シ此ノ如キ場合ニ於テモ其父タル未成年者ヲシテ其子ニ贈與ヲ爲

スコトヲ得セシムルノ必要アリ隨テ自治産未成年者ヲシテ全ク贈與ヲ爲ス能
 ハサランムルカ如キハ實際上少ナカラサル不便アリト謂フヘシ故ニ寧ロ保佐
 人ノ同意并ニ親族會ノ許可ヲ得テ有効ニ贈與ヲ爲スコトヲ得セシムルヲ以テ
 適當ナリトス(新民法ハ準禁治産者ニ許スニ保佐人ノ同意ヲ得テ贈與ヲ爲スコ
 トヲ以テセリ)

自治産未成年者カ法律ノ規定ニ從ハスシテ爲シタル行爲ハ之ヲ取消スコトヲ
 得サルヘカラス然ルニ舊民法ニ於テハ保佐人ノ立會ナクシテ爲シタル行爲ハ
 缺損アルニ非サレハ之ヲ取消スコトヲ得ストセリ是レ蓋シ未成年者ニ缺損ナ
 キニ拘ハラズ當然之ヲ取消スコトヲ得セシムルトキハ第三者ハ其損失ヲ被ラ
 ンコトヲ慮リ之ト取引ヲ爲ス者ナカルヘシトノ惡念ヨリ此ノ如キ規定ヲ設ケ
 タルモノナルヘシト雖モ元來缺損ナルモノハ其證明甚タ困難ナルカ故ニ此ノ
 如キ規定ハ未成年者ニ取リテ太タ不利益ナルノミナラス第三者ニ取リテモ其
 容易ニ取消サレサルコトヲ信スルノ結果却テ不意ノ損害ヲ被ルコトナシトセ
 ス故ニ此規定ハ甚タ當ヲ得サルモノナリ(新民法ハ準禁治産者カ其行爲ヲ取消

スニ付キ缺損ヲ必要トセス)
尙舊民法財産篇ニ於テハ嘗テ述ヘタル如ク特別ノ方式及ヒ條件ヲ要スル場合ニ於テ其方式ニ依ラスシテ爲シタル行爲ハ缺損ナキ場合ト雖モ之ヲ取消スコトヲ得ヘシトセリ然レトモ是レ實ニ法文ノ粗漏ニシテ財産篇ノ起草者ハ人事篇ニ於テ親族會又ハ裁判所ノ許可ノ如キ特別ノ方式ヲ必要トスル規定ヲ設ケラルヘシト豫想シ以テ右ノ規定ヲ置キシカ人事篇ニ於テハ保佐人ノ立會ノ外何等ノ方式ヲ必要トセザリシヲ以テ遂ニ此ノ如キ前後矛盾シタル規定ヲ生スルニ至リシモノナリ
終ニ自治産ノ消滅即チ取消ニ付テハ其範圍及ヒ條件ニ關シ各國ノ法制各異ル所アルヲ以テ此ニ一々評論スルノ違ナシト雖モ唯特ニ注意スヘキ一二ノ點ヲ示サントス第一、婚姻ヲ爲シタルニ因リ自治産ト爲リタルトキハ絕對ニ之ヲ取消スコトヲ得サルコト第二、佛法系ノ國ニ於テ認メラル、如ク自治産者ノ行爲ノ失當ナルコトヲ理由トシテ其一部ヲ取消スコトヲ許シタル規定ノ不可ナルコト是ナリ何トナレハ自治産ヲ取消スハ可ナリ法律ニ從ヒ即チ適法ニ爲

○編輯上ノ用向ハ必ス編輯部宛ニテ通信スヘシ

○質疑ハ半紙又ハ罫紙ニ問題ト其疑點トヲ簡明ニ認ムヘシ

用紙ハ一問題毎ニ別紙ヲ用フヘシ
半切葉書又ハ他ノ用事ト共ニ認メタル質疑ハ回答セス

○亂筆讀ミ難キモノ趣意不明ナルモノ亦同シ

○落丁補充ノ請求ノ際ハ必ス其講義録ヲ返戻スヘシ

○編輯用ト會計用トハ必ス別封タルヘシ

葉書ノ場合モ之ニ準ス

明治三十二年十月四日印刷
明治三十二年十月五日發行

東京市四谷區四谷仲町三丁目六番地
編輯者 小田幹治郎

東京市芝區四ノ久保明舟町十一番地
印刷者 金子鐵五郎

東京市芝區四ノ久保明舟町十一番地
印刷所 金子活版所

發行所 司法省 和佛法律學校

所在 東京市麴町區富士見
(町六丁目十六番地)

電話 (番町百七十四番)

明治廿二年十一月九日內務省許可